

V. 地域・公共マネジメントプログラム

1. 設置の趣旨と教育の目的

2000 年 4 月に地方分権一括法が施行され、地方自治体は国から権限を委譲されるとともに自己管理・自己責任のもとに政策の立案・運営を求められることになりました。

また、東日本大震災や福島原発事故など複合的な災害に見舞われ、被災地を中心として多くの地域の人々の生活が脅かされている現状があります。

このような状況の中で、2014 年には、「まち・ひと・しごと創生法」が成立し、少子高齢化への対応や東京圏への人口集中の是正を推進することが明示され、2018 年の「改正地域再生法」では、企業の東京からの移転や市町村の商店街活性化、空き店舗活用の支援などが盛り込まれました。

しかし、それでもなお、それぞれの地域は、非常に複雑かつ多様化した様々な問題を抱えています。少子高齢化の進行と福祉、地場産業や商店街の衰退、地域の環境、治安、教育に関する問題、市町村合併や財政赤字の拡大、そして安全・安心な生活の場の喪失など公共的な重要課題が山積し、住民の不安・不満が高まっています。このような状況に対処するには、行政だけでなく、地域の人々も、「新しい公共」という考え方で、独自に創造的な戦略をもって取り組む素地ができてつつあります。様々に複合する課題を抱えた地域を目の当たりにして、市民による健全なまちづくり・コミュニティづくりへの参画がますます高まっているのです。

このような状況のなか、地域社会において学際的かつ総合的な取り組みにより、多様な社会的課題の解決策を策定するなど、公共マネジメントの政策形成を担える有能な人材の養成が強く求められています。

これらの社会的要請を鑑み、それぞれの地域における諸問題に対して、学際的総合的にアプローチを進め、これを解決する高度な専門的解決能力を有する人材の養成を目的とした教育演習活動を本プログラムでは展開しております。2024 年度は、プログラム全体イベント（サマースクール）として、岡山県津山市をケーススタディとし当地にてフィールドワークを実施のうえ、行政や地元の関係者との間で実地見聞と調査を行い、2024 年 12 月 14 日にはオンラインにより津山市の市長及び市職員の方に向けて最終報告発表を行いました。

本プログラムでは、公務員志望の学生だけでなく、政界や NPO での活動を通じて地域の社会問題に積極的に関与し、問題解決に取り組んでいきたいという志の高い学生、商店街や都市の建設・インフラ整備など民間企業においても都市計画・都市運営に積極的に関与したいなど地域問題に対して高い学習意識を持っている学生のニーズにも積極的に応えていきます。

2. 2024 年度演習科目担当者および履修者数

連番	氏名	所属学部	FLP 演習A	FLP 演習B	FLP 演習C	総計	実施形態
1	工藤 裕子	法	3	2	6	11	合併(A・B・C)
2	鳴子 博子	経済	2	1	2	5	合併(A・B・C)
3	山崎 朗	経済	2	4	3	9	合併(A・B・C)
4	根本 忠宣	商	6	2	3	11	合併(A・B・C)
5	天田 城介	文	4	6	3	13	単独(A・B・C)
6	新原 道信	文	9	4	3	16	単独(A・B・C)
7	川崎 一泰	総合政策	3	2	1	6	合併(A・B・C)
8	小林 勉	総合政策	4	1	3	8	単独(A・B・C)
9	堤 和通	総合政策	2	2	－	4	単独(A・B)
合 計			35	24	24	83	

3. プログラムスケジュール

4 月 第 1 回部門授業担当者委員会

5 月 第 2 回部門授業担当者委員会

7 月 ガイダンス（一年次生向け）
第 3 回部門授業担当者委員会

8 月 学外活動（サマースクール・岡山県津山市）

11 月 2025 年度募集に伴う選考試験

12 月 第 4 回部門授業担当者委員会
学内活動（期末成果報告会）

3 月 FLP 修了発表
FLP 修了証書授与
第 5 回部門授業担当者委員会

4. プログラムの活動

サマースクール

実施日： 2024年8月19日(月)～8月20日(火)
実施都市： 岡山県津山市
実施場所： 津山市役所・他
実施内容： ヒアリング・現地調査・フィールドワーク（津山市役所ならびに関連施設）

サマースクール成果報告会・期末成果報告会

実施日： 2024年12月14日(土)13:00～
実施場所： 中央大学 多摩キャンパス 8304 教室
実施内容： サマースクール参加ゼミによる成果報告・他

5. これまでの履修生の主な就職・進学先実績

法務省、総務省、財務省、農林水産省、厚生労働省、国土交通省、文部科学省、内閣府、特許庁、参議院事務局、衆議院事務局、国税庁、環境省、気象庁、原子力規制委員会、人事院、防衛省、東京国税局、地方裁判所、裁判所事務官、家庭裁判所、高等裁判所、警視庁、福島県警察本部、北海道庁、岩手県庁、福島県庁、茨城県庁、栃木県庁、群馬県庁、埼玉県庁、千葉県庁、東京都庁、神奈川県庁、新潟県庁、山梨県庁、長野県庁、岐阜県庁、静岡県庁、三重県庁、京都府庁、逗子市役所、八王子市役所、港区役所、日立市役所、葛飾区役所、君津市役所、国立市役所、板橋区役所、江東区役所、江戸川区役所、大田区役所、北区役所、渋谷区役所、千代田区役所、練馬区役所、港区役所、特別区人事・厚生事務組合、調布市役所、小平市役所、多摩市役所、昭島市役所、羽村市役所、町田市役所、三鷹市役所、武蔵野市役所、渋谷市役所、さいたま市役所、蕨市役所、川崎市役所、小田原市役所、相模原市役所、横浜市役所、秦野市役所、藤沢市役所、宇都宮市役所、韮崎市役所、笛吹市役所、松本市役所、名古屋市役所、鈴鹿市役所、堺市役所、神戸市役所、大分市役所、大村市役所、荒川区役所、杉並区役所、品川区役所、墨田区役所、都市再生機構、中小企業基盤整備機構、日本電気、日本原子力発電、東京電力ホールディングス、四国電力、沖縄電力、日本原燃、日本銀行、みずほフィナンシャルグループ、岩手銀行、北越銀行、山梨中央銀行、ゆうちょ銀行、日本政策金融公庫、りそなホールディングス、三井住友銀行、清水銀行、大垣共立銀行、三菱 UFJ 信託銀行、組合中央金庫、多摩信用金庫、横浜信用金庫、西武信用金庫、明治安田生命、SMBC 日興証券、かんぽ生命保険、明治安田生命保険相互会社、あいおいニッセイ同和損害保険、三井住友海上火災保険、全国市町村職員共済組合連合会、日本総合研究所、ベネッセコーポレーション、マイナビ、明治乳業、鈴与、日立パワーソリューションズ、伊藤忠丸紅鉄鋼、本田技研工業、住友化学、大日本住友製薬、ヤンマー、ダイキン工業、NISSHA、キャノンマーケティングジャパン、NEC ソリューションイノベータ、インテリジェンス、プロフェッショナルバンク、東急エージェンシー、電通九州、東急コミュニティー、東日本旅客鉄道(JR 東日本)、日本航空(JAL)、京成電鉄、西日本鉄道、舞浜リゾートライン、イトーヨーカ堂、セブン-イレブン・ジャパン、東急ストア、日本マクドナルド、大日本印刷、トッパンフォトマスク、KOA、富士ソフト、三菱電機、山九、デロイトトーマツコンサルティング、アビームコンサルティング、トランス・コスモス、積水ハウス、東京建物、三井不動産レジデンシャル、近鉄不動産、NTT コミュニケーションズ、クロスキャット、NTT 都市開発、UR コミュニティ、東日本電信電話(NTT 東日本)、デル・テクノロジーズ(De11)、デジタルハリウッド、日本生活協同組合連合会、東京都国民健康保険団体連合会、日本放送協会、東京都福祉保健財団、(学)立教学院、(国)東京大学、東京都公立大学法人、東北大学公共政策大学院、慶應義塾大学法学研究科、学校法人和光学園、東京大学新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻、東京大学大学院法学政治学研究科、早稲田大学大学院法務研究科、一橋大学大学院、北海道大学大学院、中央大学大学院(法学研究科、文学研究科、公共政策研究科)、エディンバラ大学大学院など

6. 演習教育活動

(1) 工藤 裕子 (法学部・教授)

FLP演習A・B・C

<テーマ>

地域資源を活かした地域経営を考える：そのための地域資源の再発見・再評価、マネジメント

<授業の概要>

少子高齢化や地方分権化の中でさまざまな問題に直面している地域経営について、その地域に特有の資源（人材、財源、歴史文化、政治、地勢など）をいかに再発見し、再評価するか、さらにそれらをいかにマネジメントするか、を世界、特に大陸ヨーロッパ諸国の事例および日本の事例を通じて検討、考察する。地域経営の問題点について、文献およびフィールド調査で整理、理解したうえ、主に関係者へのヒアリングを通して日本のベストプラクティスを分析し、また海外事例の収集、調査を行う。過疎地域の再生事例として、中部イタリアの中山間都市にてワークショップ、研修を行うことを演習の一環とする他、日本の地方自治体でのフィールド調査も実施する。事例として扱うのは主に、諸資源が限定されている中小都市であり、大都市あるいは大都市圏における戦略等は対象としない。

<活動内容>

演習Aは、春学期前半に社会科学の調査方法、プレゼンテーションの仕方、レポートの書き方等を学んだ。社会科学の調査方法としては、国内実態調査（静岡県掛川市）を6月22～23日に現地において実施するのにあわせ、事前学習、事後の質疑のやり取りなどを経て、春学期末に政策提言のグループ・プレゼンテーションを実施し、掛川市および関係機関にフィードバックを行った。調査および政策提言のプレゼンに基づく個人レポートは、夏季課題とした。また並行して、サマースクールに向けての事前調査、情報収集と課題の特定、仮説の構築などを実施し、サマースクールの準備を進めた。

秋学期は、サマースクールのヒアリングに基づく調査研究および期末報告会でのプレゼンテーションの準備を行った。秋学期後半はまた、文献調査と座学により海外実態調査の準備を行った。海外実態調査については当初、2025年2月25日～3月8日の日程で、イタリア、エミリア＝ロマーニャ州にて実施する予定で計画しており、現地のカウンターパートとの調整はもとより、旅行代理店経由で航空券の確保等も進んでいたが、当初3名の予定であった参加者が諸事情により1名となった。1名の参加者では現地の経費負担が現実的ではないうえ、本人も1名での渡航に難色を示したため、現地開催は断念し、オンラインでの実施とした。現地カウンターパートおよび関係者の全面的なボランティア協力、そして担当教員もオンライン実施については費用補助がないため、自費での現地開催となったが、参加を表明していた1名の学生に誠意を持ってオンライン開催を決定した現地カウンターパートには謝意を表したい。

なお、オンライン研修はA生のみならず、B生、C生、そして2025年度からゼミに参加する内定者を対象に実施し、結果、すべての期の参加を得た。

演習Bについては、春学期は前年度末、春休み中に実施したイタリア研修の報告書作成の作業および各人の関心テーマを踏まえたゼミ論文テーマの選定を中心に個人研究発表と討論を進めた。春学期の後半はまた、夏季休業中から秋学期はじめにかけて実施する演習Bによる国内実態調査の準備を行った。演習A時に実施した海外実態調査を踏まえ、それぞれが関心を持つテーマを持ち寄り、演習Bとして調査するテーマの決定、訪問先の選定、訪問先機関との調整などを進め、夏季休業中から秋学期前半にかけて国内実態調査を実施した。

秋学期後半には、この研究成果をゼミで発表したうえ、ゼミ論文のテーマを選定し、個人による研究発表を行った。そのうえで、A生時の海外実態調査の報告、国内実態調査の報告、各人の研究テーマについてのレポートを含むB生の一年間の活動記録をまとめた報告書を作成した。

演習Cについては、春学期にそれぞれのゼミ論文のテーマを最終決定したうえ、執筆計画を作成、夏休みから秋学期にかけて論文を執筆、完成させたうえ、ゼミ論文集を編集した。今年度は、これからの農業のあり方、CSA による農業の活性化、温泉街のブランド化、伝統的な祭礼の活性化、MaaS による地域公共交通網の構築をテーマにしたゼミ論文が完成した。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A

実施日：2024年6月22日(土)～2024年6月23日(日)

実施都市：静岡県掛川市

実施場所：掛川市役所・他

実施内容：掛川市のダイバーシティ戦略、観光振興計画、第2期掛川子ども・子育て支援事業計画、世界農業遺産静岡の茶草場農法、災害対策と危機管理（防潮堤整備と海岸線振興）、移住政策と『学び旅』（シティ・プロモーション）、地域おこし協力隊の現状と課題、市民との協働、交通政策、自然・農業・歴史・伝統文化を継承するとうもろの里、についてのヒアリングおよび調査

成果：掛川市のダイバーシティ戦略、産業・まちづくり、観光振興、子育て支援・高齢者支援、お茶を中心とした農業振興、災害対策・危機管理、移住・定住政策とシティ・プロモーション、『学び旅』、行政と市民との協働のあり方、企業の役割などを学んだ他、市役所の関係者、コミュニティ活動に従事している人々、企業等へのヒアリングを通して、調査とヒアリングを中心とする社会調査の方法を学んだ。また、事前調査、事後のフォローアップの方法、そしてそれらを政策提言としてまとめ、プレゼンテーションおよびレポートにまとめる、という一連の作業の進め方についてマスターした。プレゼンテーションはゼミ時にグループでA生グループとして実施し、レポートは夏季休業中の課題として個人で作成した。

対象演習：A

実施日：2024年6月22日(土)

講演者：山本 和子 氏（掛川おかみさん会）

演題：商店街活性化とおかみさん会の活動ーまちなかアートを中心に

実施都市：静岡県掛川市

実施施設：掛川市内

実施内容：商店街の活性化における市民の活動について、掛川おかみさん会の会長として長年さまざまなプロジェクトに関わってこられた山本氏より、おかみさん会の活動、行政との協働、特に市内におけるパブリックアートの誘致、設置と活用、また定期的に開催しているアート・イベントについて、市内の関係箇所を巡りながら解説していただいた。

成果：掛川市内の商店街の活性化について、行政の政策のみならず、市民の参画によるさまざまなプロジェクトとその成果を学ぶことができたほか、行政とおかみさん会の協力関係によって実現したイベントや施設などを紹介していただくことで、公私協働の課題や可能性について知ることができた。また、パブリックアートが地域社会やコミュニティに与える意味、アート・イベントへの市民、特に若者の参加の必要性などについて学ぶことができた。

対象演習：A

実施日：2024年6月22日(土)

講演者：山崎 善久 氏（ローカルライフスタイル研究会）

演題：掛川におけるスローライフ活動とローカルライフスタイル研究会の役割

実施都市：静岡県掛川市

実施施設：掛川市内

実施内容：掛川市のこれまでのスローライフ活動の経緯および歴史、行政との関係、ローカルライフスタイル研究会が果たしてきた役割、『学び旅』をめぐる最近の活動などについて、市内の関係箇所を巡りながら解説していただいた。

成 果：掛川市のスローライフ活動について、特に市民の視点を学ぶことができたほか、公私協働の具体的な活動やプロジェクトの内容を学ぶことで、行政と市民との協力関係の可能性を知ることができた。掛川市においてなぜ市民と行政の協働がこれまでさかんなのか、その要因と現状を知ることができた。

対象演習：A

実 施 日：2024 年 6 月 22 日(土)

講 演 者：佐藤 雄一 氏（ローカルライフスタイル研究会）

演 題：学び旅のつくり方（＋ローカルライフスタイル研究会のまちづくりへの参加）

実施都市：静岡県掛川市

実施施設：掛川市内

実施内容：コンセプト株式会社代表でローカルライフスタイル研究会メンバーの佐藤氏からは、市役所とともにローカルライフスタイル研究会および特に氏が取り組んできた『学び旅』について、そのコンセプトおよびつくり方を解説していただいた。

『学び旅』は FLP 工藤ゼミが掛川市内で実施してきたような研修の旅であり、掛川市は全国の多くの大学のさまざまなゼミの活動に協力し、テーマに沿った見学先やヒアリング先の発掘、講師の派遣などのコーディネート、ロジスティックなどのノウハウを蓄積してきており、それらをカタログ化しているが、その中からいくつかの具体的なプラン等について、実施場所を訪れつつ、お話しいただいた。

成 果：掛川市と地元の NP0 団体を構成する市民とが推進する『学び旅』を知ること、新しいコト消費、トキ消費、エモ消費の旅のあり方、若者の交流人口の増やし方、またそのために掛川において具体的にどのようなアクターがどのような協力関係を築いてきたのか、などについても学ぶことができた。

対象演習：B

実 施 日：2024 年 9 月 16 日(月)～2024 年 9 月 20 日(金)

実施都市：岡山県西栗倉村・鳥取県八頭町

実施場所：西栗倉村役場・他

実施内容：当該調査を実施した B 生が各自のテーマに基づいたヒアリング

成 果：各自がゼミ論文のテーマとして発展させるべきテーマをそれぞれ模索し、またその情報、データを収集した。

対象演習：C

実 施 日：2024 年 11 月 10 日(日)～2024 年 11 月 12 日(火)

実施都市：熊本県阿蘇郡・鹿児島県いちき串木野市

実施場所：黒川温泉観光旅館協同組合・七夕踊伝承会

実施内容：ゼミ論文の作成にあたって必要なインタビューの実施

成 果：インタビューの結果はゼミ論文に有効に活用された。

対象演習：A・B・C

実 施 日：2025 年 2 月 27 日(木)～2025 年 3 月 1 日(土)

実施都市：イタリア エミリア＝ロマーニャ州（チヴィテッラ・ディ・ロマーニャ市）からのライブ配信

実施場所：ファッジョーリ農場からのライブ配信

実施内容：EU のプロジェクト等でもよく知られる、アグリツーリズム農場であるファッジョーリ農場から、小規模自治体および私企業、大学、組合等の活動が活発なエミ

リア＝ロマーニャ地域の地域振興政策について、地方自治体（市長）、州政府（担当者）、地域振興に関係する組合や公社の担当者のレクチャー、インタビューをライブ配信し、質疑応答を通じて理解を深めた。

成 果：海外の地方自治体の首長等の主要ステークホルダーにインタビューを行い、オンラインではあったが、充実した質疑応答を経て本格的な調査が実施できた。特に、日本では限界集落と呼ばれるような地域においても、地産地消、観光、アグリツーリズム、スローフードなどによって活性化することが可能であることを知ることができた。EUにおけるアグリツーリズムのパイオニアであるファウスト・ファッジョーリ氏とその継承者で女性経営者であるフランチェスカ・ファッジョーリ氏のレクチャーのみならず、中山間地域における若者の起業、特に就農の促進政策に携わるコンサルタントのルーカ・マウリエッロ氏、イタリアのアグリツーリズム法（国法）とその施行にかかわる各州法のうち、現地のエミリア＝ロマーニャ州法の起草、改正に携わったエミリア＝ロマーニャ州のマウロ・フィーニ氏からのレクチャーおよびインタビューを行うことができた。

A生は、各自のゼミ論文テーマに向けてさまざまなインプットを得ることができ、またそれぞれ、いろいろな感慨や学びがあった。B生は、昨年度、現地で実施した調査時には見落としていた、あるいは聞き逃していたディテールに気付くことができ、有意義であった。C生も、現地で調査実施時には、海外での研修に対する緊張や周囲への配慮から、必ずしもインタビューに集中できなかった、あるいは理解が充分でなかった点について、オンライン開催の長所である、慣れた環境での学習であったことから、復習になったのみならず、新たな発見が多かった。2025年度に入ゼミする新ゼミ生については、来年度現地で学ぶ事項の予習となり、有意義なプレ・ゼミ活動となった。

対象演習：A・B・C

実施日：2025年2月27日（木）

講演者：Fausto Faggioli 氏（Fattorie Faggioli 創始者）

演 題：イタリアにおける農場・農村政策の歴史・現在・未来：アグリツーリズム法を中心として

実施都市：チヴィテッラ・ディ・ロマーニャ市（イタリア）からライブ配信

実施施設：ファッジョーリ農場 ボルゴ・バジーノよりライブ配信

実施内容：EUのモデル・ケースとされるファッジョーリ農場を1982年に創業、イタリアのアグリツーリズム法の制定にも大きく貢献、以来、EUのさまざまな農業振興・農村活性化等のプロジェクト・マネージャとして活躍する一方、近年ではボローニャ大学、ヴェネツィア大学、ボッコーニ商科大学などで後進の指導を中心に活動されている講演者より、イタリアのアグリツーリズムについて、歴史やこれまでの主要プロジェクトを振り返りつつ、コロナ禍で多くの産業が疲弊する中、むしろ活気を呈したアグリツーリズムおよび農業・農村の可能性についてお話しいただいた。また、ケース・ヒストリーとしてファッジョーリ農場の成り立ちや現状についても詳しく解説していただいた。

成 果：A生については現地で調査が叶わない中、今後の調査研究にあたっての問題意識を深めることに役立った。B生については前年度の現地調査の復習の意義があった。C生についても、現地調査時には体系的なお話を聞くことができなかったため、貴重な機会となった。

対象演習：A・B・C

実施日：2025年2月28日（金）

講演者：Francesca Faggioli 氏（Faggioli Experience 代表）

演 題：エクリペリエンスの考えるコト消費・トキ消費

実施都市：チヴィテッラ・ディ・ロマーニャ市（イタリア）からライブ配信

実施施設：ファッジオーリ農場 ボルゴ・バジーノよりライブ配信

実施内容：ファッジオーリ農場の創始者を継いで同農場の共同代表として活動する傍ら、同農場で受け入れる研修の企画、コーディネート、デジタル・サポートを実施する Faggioli Experience をパンデミック下に立ち上げ、その代表を務める講演者のこれまでの活動について、特にパンデミック中に始めたデジタル配信活動やその後のコト消費に焦点を当てた観光の作り方を中心にお話しいただいた。また、最近のエモ消費やモチベーション消費について、学生からの質問を受けて女性起業家としての活動についてもお話しいただいた。

成 果：情報発信および広報活動の重要性、デジタル・ツールの活用の方法、そしてコト消費・トキ消費・エモ消費の具体的なあり方、体験学習の重要性などを学ぶ機会となった。女性活躍については、研究テーマとして関心を持っているゼミ生にとっては、生の声を聞く貴重な機会となった。

A 生においては、国内については学習してきたコト消費・トキ消費について海外の事情を知る機会となり、B 生においては、現地研修時にはまだ含まれていなかったエモ消費やモチベーション消費についての見識を深めることができた。C 生については、海外実態調査実施時には含まれていなかった、女性起業家の視点を学ぶことができた。

(2) 鳴子 博子(経済学部・教授)

FLP演習A・B・C

<テーマ>

本物のジェンダー平等を実現するために何が必要か
—政治・法律・経済の視点からの探究—

<授業の概要>

世界経済フォーラムのジェンダー・ギャップ指数における日本の低迷、とりわけ政治と経済の分野で女性が劣位に立たされ、世界から大きく取り残されている事実をまず確認する。女男や多様な性の人々は、いかにして自分らしく働き、生きてゆくことができるだろうか。本物のジェンダー平等を実現するためには何が必要か、政治・法律・経済の視点から探究してゆく。個人と社会(職場・地域)・家族の関係を時代の変容とともに問い直し、現代の日本社会に生きる一人一人の働き方、生き方を不自由にしている障害物の正体を突き止め、困難を少しでも除去するための具体的な対策・政策を模索することを目的とする。演習テーマに関する文献の輪読を通して基本的な知識、理解を獲得すること、具体的な研究テーマ、フィールドを選んで、資料収集、調査、分析を行うことができるようになることを目標とする。

<活動内容>

2024年度はメンバーが少人数であることから、A・B・C生の合併授業とし、A生は多摩キャンパスの教室にて対面で、B・C生は原則、茗荷谷キャンパスの教室に集まりオンライン参加のハイブリッド型でゼミを実施した。研究テーマは、話し合いの結果、A生・B生が同一テーマの研究を進めることになった。C生はこれまで二年間の研究を踏まえつつ、最終学年として活動を進めることとした。

【A生・B生】

最初にゼミ活動の土台となる共通認識を得るため輪読を行った。輪読の対象はチャイルド・ペナルティに関する調査研究の報告書や女性の政治参画(クオータやパリテ)に関する論考であった。次いで今年度の調査研究のテーマについての話し合い、先行研究調べ、サマースクール対象地である岡山県津山市に関する資料の読み込みなどを並行して行った。A生の問題関心は、女性が働きながら子育てを無理なく行える状況をつくることにあったので、今年度のテーマは「津山市における子育て支援センターを通じた地域交流」に決まった。

ところで、現B生のA生時のテーマは「若者誘致による街の発展」であった。このテーマが選ばれた理由は、サマースクール先での、調査の進めやすさや地域の抱える課題の重要度などであったが、当初考えていたテーマは「女性が出産しても安心して働き続けるために必要な保育環境整備、子育て支援政策」であった。そうした経緯もあり、B生はA生をバックアップし、あるいはむしろ、A生をリードする形で、A生・B生が「津山市における子育て支援センターを通じた地域交流」を追究することとなった。

津山市でのヒアリング先は、こども保育課、株式会社おもちゃ王国、NPO法人みる・あそぶ・そだつ、仕事・移住支援室などであったが、市では育児に対する支援や設備は充実している一方、働く男性に対する家事・育児参加への働きかけが不十分であることが分かった。そのため、B生はA生とともに、サマースクール後、研究テーマを「津山市における父親の育児参加推進の街づくり」に変更し、6年後に向けた短期策と20年後に向けた長期策に分けて政策提言を取りまとめ、12月の期末成果報告会に臨み、1月にサマースクール報告書を作成した。子育て推進課及びこども保育課を提言先にした短期策は、「子育て支援ガイドブックの置き場を増やす」、「家事育児分担表を作成する」であり、こども保育課(子育て支援センター)を提言先とした長期策は、市が主導し、市内の企業や家庭に呼びかけ「男性育児サポートグループを作る」であった。

以上、2024年度の活動は試行錯誤が続いたが、テーマ自体はA生・B生ともに、自発的に選び取ったものであるだけに、次年度の調査研究でのステップアップが期待できるものと

なった。



【C 生】

C 生の 2024 年度の活動は、東京都ワークショップの発表と 3 年間の調査研究の総まとめとしての 2024 年度期末成果報告書の作成であった。

東京都ワークショップは、2024 年 10 月 23 日に多摩キャンパスで開催され、「重点政策 2024」に関する現状分析や将来像について 4 ゼミ 5 チームが参加した。鳴子ゼミ C 生は自由な婚姻制度の推進と子育て環境の充実化をテーマに選び「子育てしやすい東京を目指し、シームレスに支援」と題して発表した。現状分析では、選択的夫婦別姓制度の未導入、妊娠・出産・子育てにおける女性のキャリアストップ、ひとり親の支援不足の 3 点が問題として浮かび上がった。東京都への政策提言は、①事実婚・同性婚の制度強化 ②一貫した子育てのサービス拡大と支援 ③ひとり親への支援の 3 点となった。政策提言は短期策と長期策とに分けて具体案を説明したが、例えば、②一貫した子育てのサービス拡大と支援の短期策では、不妊治療助成事業における所得制限、治療回数制限の撤廃と無痛分娩や産前産後ケアのサービス拡大と補助を挙げた。2035 年の東京都の姿として「多様な家族が当たり前に存在する子どもを産みやすい・育てやすい社会を実現し、少子化対策成功のモデル都市として国内だけでなく国外の少子化問題に待ったをかける存在になる」を掲げ、発表を締め括った。都職員からアドバイスや質問、感想をいただき、かつワークショップ参加の学生に真剣に耳を傾けてもらえた経験は、C 生の大きな励みになった。

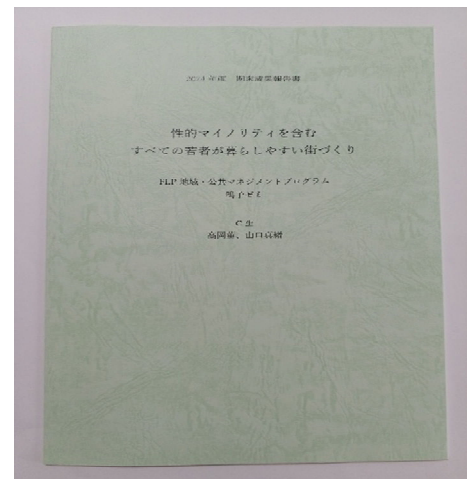
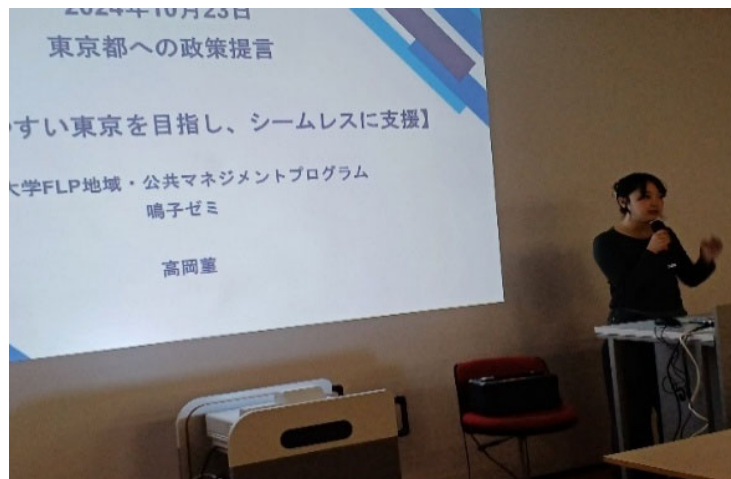
2024 年度期末成果報告書「性的マイノリティを含むすべての若者が暮らしやすい街づくり」は 3 年間の活動の総まとめとして冊子にまとめられた。報告書の研究テーマは、A 生時のテーマ「性的マイノリティの若者が暮らしやすい街づくり」から 3 年間一貫しており、①(A 生)「サマースクール in 八王子市」 ②(B 生)映画鑑賞会 ③(C 生)今後の展望と内容的に三章構成になっている。

②の映画鑑賞会(2023 年 11 月 25 日)は、東京都立大学の杉田真衣先生に特別授業(講演)をしていただいたのち、映画『カランコエの花』を鑑賞し、参加者がワークを行うイベントであった。②は①の政策提言「大学生が主体となって、八王子市の後援のもと LGBT の啓発イベントを行う」を踏まえ、八王子市(大学コンソーシアム八王子)の学生企画事業補助金制度と白門「学生活動スタートアップ」支援金を得て実施したものであった。

ところで、2024 年度は、②の映画鑑賞会をきっかけとしてさらにステップアップした活動を八王子市の中で展開してゆく予定であったが、市の中での発展的な活動は、就活の忙しさなどで活動に十分な時間を割くことができなかったため展開できなかった。しかし、報告書には、上述の都のワークショップの発表の他、C 生がフィールドワークを通して地域課題を解決するプログラム「ミチシロカ」に参加して活動した記録も含めることにした。ミチシロカでの活動は、本学の FLP の活動とは言えないものの、同プログラムの趣旨が FLP の目的と重なり合う部分が多く、C 生がその経験を持ち帰り、その後の FLP 活動に活かしたためである。ミチシロカへの参加は 2023 年夏であったが、北海道中標津町にて、関西大学の学生と

チームをつくり、町の施設へのヒアリング、町民へのアンケート、中標津町役場への提案「トイレから目指す清潔な未来」を行った。提案内容は、町内のトイレにデジタルサイネージやフェムテックを活用した広告事業を導入し、その資金で性教育を行い、生理をタブー視しない社会づくりと生理休暇や生理公欠を取得しやすい環境づくりを推進するというものだった。

以上、C生の活動は、当初の予定とは異なるものとなったが、限られた時間のなかで善戦したと言える。C生の活動は鳴子ゼミA生・B生に刺激を与えたが、地域・公共マネジメントプログラムのメンバーに、得られた成果と残された課題が共有されることを願うものである。



(3) 山崎 朗(経済学部・教授)

F L P 演習 A・B・C

<テーマ>

地域創生のデザインと地域イノベーション

<授業の概要>

2008 年から日本の人口は減少しています。2008 年以前から人口減少している地域も少なくありません。東京都もまもなく人口減少に転じると予想されているなかで、地域をいかにデザインしていくのかが問われています。本ゼミでは、その観点から、地域イノベーション政策、産業クラスター、地域のグローバル化、地域のプレミアム化を取り上げます。

テキスト、参考文献をてがかりにしながら、地域のグローバル化について各自、関心のあるテーマを設定し、自主的な研究を行います。また、全員でフィールドワークに行きます。2022 年度は北海道東川町、2023 年度は沖縄県石垣市で調査を実施しました。2024 年度は鳥取県と島根県を対象地域とし、街づくりや地域エネルギー会社についてヒヤリング調査を実施しました。

ゼミ内における研究成果は、懸賞論文やプレゼン大会やビジネスコンテストなどへの応募という形で社会に公開していきます。

これまでに「創立 130 周年中央大学の未来～私の提言～ 最優秀学生賞」、「第 59 回みずほ学術振興財団懸賞論文佳作」、「第 1 回地球の歩き方総合研究所懸賞論文佳作」、「第 61 回みずほ学術振興財団懸賞論文三等<一等・二等は該当なし>」、「学術・文化・産業ネットワーク多摩主催:2023 年度まちづくり・ものづくり部門 学術賞奨励賞およびビジネス優秀賞」、2023 年度「飛島建設 地方創生デザインアワード 特別賞」、2023 年度「学会会長賞」、2023 年度「クミアイ化学工業第 12 回学生懸賞論文特別賞」、2024 年度「学会会長奨励賞」などの成果が出ています。

<活動内容>

山崎ゼミは、A 生、B 生、C 生合同で開催し、A 生によるサマースクールの調査研究へのアドバイスを B 生と C 生が行っています。プレゼンの練習を大教室で 2 回実施し、中間管理住宅に関する政策提言は、津山市の職員にも評価されました。また、東京都への政策提言(2024 年 10 月 23 日:中央大学多摩キャンパス)のプレゼンにおいても、東京都の空き家対策および中間管理住宅として活用に関する提言でした。その後、東京都からは、空き家を活用した子育て世代に対する支援策が公表されました。

テキストとしては、山崎朗編著『地域創生のデザイン』中央経済社と山崎朗編著『地域産業のイノベーションシステム』学芸出版社を使用し、サマースクールや懸賞論文に関連する章の輪読を行いました。

また、複数の懸賞論文に応募するためのゼミ生独自の調査をもとに論文執筆も行い、現在応募中となっています。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習:A・B・C

実施日:2024 年 9 月 17 日(火)～2024 年 9 月 19 日(木)

実施都市:島根県松江市

実施場所:松江市役所・他

実施内容:街づくり団体、商店街の活性化の団体やローカルエナジーの太陽光発電による地域電力会社などでのヒヤリングを実施。

成果:サマースクールの対象地域である岡山県津山市と共通性のある地域課題があり、とくに商店街の活性化について政策提言の参考となりました。

対象演習：B・C

実施日：2024年11月1日(金)

実施都市：埼玉県さいたま市

実施場所：大宮ソニックシティ

実施内容：山崎ゼミで訪問したヒヤリング先であるローカルエナジー（鳥取県米子市）が登壇したシンポジウムに参加しました。シンポジウム名は小水力発電大会。第3分科会「地域脱炭素と小水力発電」に参加しました。

成果：地域・公共や地方創生と接点が多い再生可能エネルギーについての学びを深め、ゼミ活動のさらなる発展に活かすことができました。

(4) 根本 忠宣 (商学部・教授)

F L P 演習 A・B・C

<テーマ>

【A 生】 地域活性化の源泉を探る

【B 生】 地域振興の意義と効果について考える

【C 生】 地域に関する研究論文の作成

<授業の概要>

【A 生】

地域活性化という言葉が一人歩きしているが、そもそも地域が活性化するとは何か曖昧であり、立場によって想定する内容は異なっている。この点を明確にしたうえで、地域をどう活性化すべきなのかを徹底的に考える。その際、都市と地方、中心と周辺、グローバルな地域間競争という視点を考慮して地域の地理性や特性を踏まえた分析を念頭に置く。

具体的な分析に当たっては定住地としての地域、働く場としての地域、商業地としての地域、学びの場としての地域、観光地としての地域など評価すべき軸を明確にしたうえで、地域活性化の源泉が何かを特定する。

[授業の内容]

①文献解説

古典の輪読：ジェイコブズ『都市の原理』SD 選書、『発展する地域、衰退する地域』ちくま学芸文庫

関連論文の解説：必要に応じて適宜紹介

その他参考文献：ウェストルンド・ハース編『ポストアーバン都市・地域論』ウェッジ、その他テーマに関連する学術論文

②サマースクールへの参加と報告書の作成

③地域活動への参加

静岡県伊東市における地域活性化のためのビジョン作成

静岡県宇佐美市における観光地活性化活動

④フィールドワークを通じた地域視察

【B 生】

B 生の大きな目標はゼミ交流会での報告です。ゼミ交流会は関西大学商学部横山ゼミ、北海道大学経営学部相原ゼミ、大阪市立大学商学部林ゼミ、西南学院大学経済学部西田ゼミが参加しており、学生に本格的な学術論文を作成してもらい、報告・討論してもらう場です。6月に中間報告会、12月に最終報告会が予定されており、他大学との交流も含めた密度の濃い大会です。10本以上の報告がなされ、なかには大学院レベルの報告も含まれています。計量経済学、組織論、地場産業、経営学、金融論など専門の異なる教員（ゼミ）が交流することで様々な視点や分析手法があることを学ぶことができるのも大きな利点です。（各大学の教員は研究水準の高いメンバーばかりなので論文に対する評価はかなり厳しいです）また、教員と学生が採点することで論文の順位も決めますので適度な競争意識が働くことで参加者全員が真剣に取り組むような雰囲気が定着しています。ちなみに根本ゼミはコロナ前の大会では2年連続で優秀論文に選ばれています。（コロナ禍はオンライン開催で、順位づけは行わなかった）

また、A 生との合同ゼミとなりますので B 生はチューターとしての役割を果たしてもらいます。報告や議論の仕方、サマースクールでの調査の進め方など適宜サポートをしてもらうことで、自分自身の不足も同時に補って下さい。

【C 生】

研究論文の作成。研究論文の作成指導を行います。

<活動内容>

以下の論文を作成した。

「観光地ベッドタウンの可能性～宇佐美を事例に～」

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：C

実施日：2024年5月12日(日)

実施都市：静岡県伊東市

実施場所：お宿「喜喜哀楽」

実施内容：NP0 法人「宇佐美・城山街づくりプロジェクト」より運営を任されるまちづくり座談会の実施

成果：・宇佐美のまちづくりに対する地域住民の声を聞くことができた
・宇佐美のまちづくりに対して地域住民とともに考えを深めることができた

対象演習：C

実施日：2024年5月23日(木)

実施都市：静岡県伊東市

実施場所：海風荘

実施内容：Usami フェス実行委員長の山岸涼子様への取材

成果：Usami フェス立ち上げの変遷を知ることができた

対象演習：A・C

実施日：2024年5月26日(日)

実施都市：静岡県伊東市

実施場所：宇佐美駅

実施内容：商店街活性化企画の手伝いと取材

成果：・兼ねてよりゼミとして関わってきた商店街活性化企画の実施
・A 生は本ゼミのフィールドワーク地である宇佐美の見学により地域住民とも関係を深めることができた

対象演習：A・B・C

実施日：2024年6月1日(土)～2024年6月2日(日)

実施都市：静岡県伊東市

実施場所：伊東駅前オレンジビーチ

実施内容：三学年合同見学調査、地域のボランティア団体の企画した清掃活動への参加

成果：・A、B 生は本ゼミのフィールドワーク地である宇佐美の見学により地域住民とも関係を深めることができた
・地域での活動において助けとなるようなキーパーソンと繋がりを持つことができた

対象演習：C

実施日：2024年6月5日(水)

実施都市：静岡県伊東市

実施場所：うみまち不動産

実施内容：NP0 法人「宇佐美・城山街づくりプロジェクト」定例会議への参加

成果：・NP0 法人「宇佐美・城山街づくりプロジェクト」の方々と駅前通り活性化企画「ぼーっと宇佐美」の反省会が実施できた
・根本ゼミの今後の関わりについて話し合いができた

対象演習：C

実施日：2023年6月16日(日)

実施都市：静岡県伊東市

実施場所：お宿「喜喜哀楽」

実施内容：お宿「喜喜哀楽」を営みながらまちづくりへのアクションをされている磯部徹様への取材

成果：地域に根ざした実際のまちづくりについて知ることができた

対象演習：B

実施日：2024年6月28日(金)～2024年7月1日(月)

実施都市：北海道札幌市

実施場所：北海道大学

実施内容：ゼミ交流会の中間報告会

成果：「逗子市にみる地域愛着の醸成」を報告し、高い評価を得た

対象演習：C

実施日：2023年7月21日(日)

実施都市：静岡県伊東市

実施場所：お宿「喜喜哀楽」

実施内容：NP0 法人「宇佐美・城山街づくりプロジェクト」より運営を任されるまちづくり座談会の実施

成果：・宇佐美のまちづくりに対する地域住民の声を聞くことができた
・宇佐美のまちづくりに対して地域住民とともに考えを深めることができた

対象演習：A・B・C

実施日：2024年9月11日(水)～2024年9月12日(木)

実施都市：福島県南会津郡

実施場所：大内宿・他

実施内容：大内宿などを中心に、会津に残る伝統的な生活スタイルの存続可能性についてフィールドサーベイを実施した

対象演習：B

実施日：2024年12月21日(土)～ 2024年12月23日(月)

実施都市：大阪府大阪市

実施場所：関西大学梅田キャンパス

実施内容：ゼミ交流会の最終報告会

成果：「逗子市にみる地域愛着の醸成」を報告し、高い評価を得た

(5) 天田 城介 (文学部・教授)

FLP 演習 A

<テーマ>

現代日本社会において人びとが生きていく場所としての地域を考える

<授業の概要>

現代日本社会において人びとが生きていくことを可能にする場所として、あるいはその逆に人びとが生きていく上での困難を生み出す場所としてどのように地域があるのか、あるいは当該地域においていかなる社会的仕組み（家族、福祉、医療、教育、労働、社会運動、産業など）によって人びとは生き延びていくことが可能になったり、困難になっているのかを、インテンシヴなフィールドワークを通じて明らかにする。

演習 A では、ゼミ生のそれぞれの問題関心を大事にしつつ、前期にサマースクールでの調査設計とフィールドワークの準備を行い、サマースクールではフィールドワークの実施・分析・考察・プレゼンテーションを遂行する。後期では、サマースクールのフィールドワークの追加調査を実施すると同時に、データ分析・データ解釈作業を行ったのち、期末成果報告会でのプレゼンテーション、最終報告書の作成を行う。また、可能であれば、東京圏郊外（八王子市・多摩市・日野市などのみならず、東京都・神奈川県・埼玉県・千葉県などを含む）へのインテンシヴなフィールドワークを実施する予定である。これらの調査を通じて徹底的に分析・考究していくことになる。

演習は当該地域のテーマに関する基本文献の講読と同時に、受講生の研究発表を中心に進める。報告者・司会者・討論者といった役割を毎回決めて、受講生による主体的なゼミ運営を行う。

<活動内容>

前期には、2024 年 8 月 19 日（月）～20 日（火）に実施した「中央大学 FLP 地域・公共マネジメントプログラム 2024 年度 サマースクール in 津山市」の準備のため、岡山県津山市に関する先行研究をレビューしつつ、津山市がまとめた各種行政資料や報告書などを渉猟した。こうした文献レビューと同時に、研究計画書の作成、質問項目の設定、インタビュー対象者の選定などを行い、リサーチデザインを確定していった。とりわけ、今年度のサマースクール調査の「問い」を「ひとり親家庭はどのような困難を抱えているのか」をテーマとし、当該テーマを「当事者の抱える困難」と「支援者がおかれている文脈と状況」の 2 つの視点から解説するという形で調査を設計した。こうした調査設計のもとでより緻密かつダイナミックな調査を行うための準備を進めていった。幸いにも、今年度からはコロナ禍の様々な制約を受けることなく、調査を設計・計画・実施することができた。実際、2024 年 8 月 19 日（月）～20 日（火）に岡山県津山市を訪ね、一日目に、津山市役所子育て推進課・健康増進課と津山市役所人権啓発課を、2 日目に NPO 法人オレンジハートと認定 NPO 法人オリーブの家を訪問し、インタビュー調査を実施することができた。それらのデータを緻密に分析したのち、丁寧に考察を深め、具体的案政策提言をまとめた。今回はそうした調査結果を 3 日目の調査報告会にて報告することはなかったが、インタビューデータを持ち帰り、夏期休業期間や後期授業ではそれらのデータをもとに幾重にも慎重に分析を重ねていった。

上記調査の結果として、【1】ひとり親家庭の当事者、とりわけひとり親家庭の母親たちは複合的な余裕のなさを抱えているため、声を上げることが難しいこと、【2】行政や NPO 法人などの支援者においてはどこから「支援」するかのが線引きが難しいため、当事者から声を上げてもらうことが必要であり、そうであるがゆえに、当事者が余裕がない生活の中でも声をあげやすい環境を作る必要があること、【3】そうした声を上げやすい環境づくりとして、①支援情報が日常的に目に入る仕組みを構築すること、②支援までの手続きが分かりやすい体制を整えること、③頼ることへの抵抗を減らす／ハードルを下げるのが求められていること、【4】受動的 (Passive) な状態にある当事者を能動的 (Active) 主体に変えるための実践と制度が必要であることを提示した。

上記の結果を 12 月 14 日(土)の期末成果報告会で報告したところ、幸いにも参加して下さった方々からも高い評価を得ることができ、大変実りある報告会となった。

年度末は FLP 報告書の作成を行うと同時に、2025 年度より本格的に実施する東京圏郊外(八王子市・多摩市・日野市などのみならず、東京都・神奈川県・埼玉県・千葉県などを含む)調査プロジェクトのフィールドワークを検討した。具体的には、東京圏郊外調査プロジェクトを当該自治体や支援団体と共同で進めながら、定期的に調査報告会を実施し、最終調査報告書として完成するための年間計画等を議論した。

全体としては、2023 年 5 月より新型コロナウイルス感染症が 5 類感染症に引き下げられたことによって 2023 年度もコロナ禍のような制約を受けることはなくなっていたものの、対象者によっては慎重な対応が求められることがあったが、2024 年度は様々な制約を受けることがなく、自らが設計・計画したフィールドワークやインタビューを中心とする調査を実際に実施することができ、大変充実したものとなった。また、学生たちは非常に熱心かつ緻密にインタビュー調査や質問票調査に取り組んでくれたため、きわめて実りのある一年になったと思う。2025 年度の本格的な調査プロジェクト始動に向けた社会調査を行うことができたし、調査プロジェクト全体について学ぶこともできた。

<実態調査・見学調査・講演会>

2024 年 8 月 19 日(月)～20 日(火)に「中央大学 FLP 地域・公共マネジメントプログラム 2024 年度 サマースクール in 津山市」を実施した。なお、8 月 19 日(月)は午前中から調査を実施するため、8 月 18 日(日)を移動日として調査の準備にあたった。

FLP演習B

<テーマ>

現代日本社会において人びとが生きていく場所としての地域を考える

<授業の概要>

現代日本社会においてどのように人びとが生きていくことを可能にする場所として、あるいはその逆に人びとが生きていく上での困難を生み出す場所として地域があるのか、その地域におけるどのような仕組み（家族、福祉、医療、教育、労働、社会運動、産業など）によって人びとが生き延びていくことが可能となったり、困難となっているのかを探求する。

演習B、演習Cでは、一年間を通じて東京圏郊外（八王子市・多摩市・日野市などのみならず、東京都・神奈川県・埼玉県・千葉県などを含む）をフィールドにインテンシヴなフィールドワークを実施すると同時に、春・夏・冬の3回、全国各地のフィールドワークを行うことを通じて比較検討をしていく。

<活動内容>

全体としては、2024年度は様々な制約を受けることがなく、自らが設計・計画したフィールドワークやインタビューを中心とする調査を実際に実施することができ、大変充実したものとなった。具体的には、定期的な東京圏でのインタビュー調査やフィールドワークを実施すると同時に、熊本県（熊本市ならびに合志市）での夏季フィールドワークも実施することができた。そのため、ゼミ生はインタビューを中心に大変実りのある調査を実施し、その研究成果をゼミ報告書の形で結実してくれた。大変充実した1年間となった。

前期は、共通する問題関心をもとに「障害者班」「女性班」「つながり班」の3グループに分けて、それぞれのグループごとに研究計画を作成し、調査対象者を選定し、実際に調査対象者に調査依頼をしてインタビューを実行した。調査は2024年6月～2025年1月にかけて、各グループが自らのテーマに関連する分野において支援活動を行っているNPO法人や当事者会（ピアグループ含む）などに対して実施した。各グループは概ね3つのNPO法人や当事者会（ピアグループ含む）等に1回90～120分程度のインタビューを行い、それらのインタビューを録音・録画した。調査後はインタビュー調査のデータのコーディング作業を行って、詳細かつ緻密な分析作業をできるだけ丁寧に行うようにした。

今年度の夏季フィールドワークは、2024年8月21日（水）～8月23日（金）において熊本県（熊本市ならびに合志市）にて実施した。

1日目の8月21日（水）は、熊本市において県営住宅の団地1階にて、近くの健軍商店会や地域住民とともに福祉の拠点となって、子ども・障害者・高齢者を包括的に支援しているNPO法人おーさあを訪問し、地域包括ケアの実践の可能性と困難について学び、一人一人のニーズに即して臨機応変に対応することの実践的意味について考察した。宮川いつ子氏（NPO法人おーさあ施設長）をはじめ、複数のスタッフからお話をお聞きすることができた。

その後、慈恵病院の取り組みに関して詳細な取材を続けてきた林田賢一郎氏（熊本日新新聞大津総局総局長）に講演をしていただく。その後、林田氏とともに慈恵病院を訪問し、蓮田健氏（医療法人聖粒会慈恵病院理事長）からこれまでの慈恵病院の「こうのとりのゆりかご」（「赤ちゃんポスト」）の取り組み、また今日における内密出産や特別養子縁組の実践における困難や課題などについて講演していただいた。

2日目の8月22日（木）は、国立療養所菊池恵楓園を訪問し、宮原保幸氏（国立療養所菊池恵楓園職員）にガイドしていただきながら、菊池恵楓園歴史資料館を見学した。その後、長きにわたって国立療養所菊池恵楓園自治会に関わってきた太田明氏（国立療養所菊池恵楓園自治会副会長）にこれまでのハンセン病当事者の闘いの歴史と今日におけるハンセン病問題における切実な課題について講演していただいた。

その後、熊本市内に戻り、宅老所・グループホーム・小規模多機能を通じて先駆的に高齢者支援を展開してきた川原秀夫氏（NPO法人コレクティブ理事長）に、今日において地域で高齢者を支えることの実践的意味とその課題、熊本地震における地域ケアの意味合いなどに

ついて講演していただいた。

3日目の8月23日（金）は、事前学習と東京圏にてフィールドワークを積み重ねてきた各グループに分かれて、「障害者班」は社会福祉法人ライン工房を、「女性班」は熊本市こころの健康センターを、「つながり班」はNPO 法人フリースクール地球子屋を各々訪問し、調査を実施した。

熊本県において地域に根差して当事者やその当事者を支える取り組みをしてきた人びとやNPO 法人などを訪ね、当事者や支援者に直接お話をお聞きすることは学生たちにとって大いなる学びとなった。このようなフィールドワークならびに講演から学生たちは現場にて何がどのように生じており、どのような困難や課題をもたらすかについて考えることはこれ以上の学びになったと確信するものである。

当ゼミの今年度のテーマは「地域における当事者の声と支援実践」である。各地域において困難を抱える人たちはいかに暮らしているのか、支援者は当事者をどのように支えているのかを分析した上で、それぞれの「地域」の差異を比較検討することで、「支援実践の場としての地域」を考察した。こうしたインタビューやフィールドワークで収集したデータを分析し、後期にはその分析と考察を深めた。

後期は、各グループで前期に実施したフィールドワークやインタビューの結果を踏まえ、新たに調査を設計し直し、更なるインタビューやフィールドワークを実施した。後期後半からはFLP 報告書の作成を行うと同時に、2025 年度にさらに本格的に展開する東京圏郊外調査プロジェクト（八王子市・多摩市・日野市ほか）のフィールドワークについて検討した。

学生たちは非常に熱心かつ緻密にフィールドワークやインタビューに取り組んでくれたため、きわめて実りのある一年になった。2025 年度に向けて更に本格的な調査プロジェクトの始動に向けた調査を行うことができたし、調査プロジェクト全体について学ぶこともできた。

<実態調査・見学調査・講演会>

実態調査（夏季フィールドワーク）は、2024 年8月21日（水）～8月23日（金）において熊本県（熊本市ならびに合志市）にて実施した。

対象演習：B・C

実施日：2024 年8月21日（水）～8月23日（金）

実施都市：熊本市ならびに合志市

実施場所：NPO 法人おーさあ、医療法人聖粒会慈恵病院、国立療養所菊池恵楓園・他

2024 年度は、B・C 生のテーマである「地域における当事者の声と支援実践」について、宮川いつ子氏（NPO 法人おーさあ施設長）、林田賢一郎氏（熊本日新聞大津総局総局長）、蓮田健氏（医療法人聖粒会慈恵病院理事長）、太田明氏（国立療養所菊池恵楓園入所者自治会副会長）、川原秀夫氏（NPO 法人コレクティブ理事長）を講師にお招きし、そのうち演習 B では以下の講演会を開催した。

対象演習：B・C

実施日：2024 年8月21日（水）13:10～15:00

講演者：宮川 いつ子 氏（NPO 法人おーさあ施設長）

演 題：NPO 法人おーさあの地域実践とその展開

実施施設：健軍くらしささえ愛工房（県営健軍団地1階）

実施内容：宮川いつ子氏より、官民協力しながら全国に先駆けて先進的・先駆的な小規模多機能ケアを展開してきた NPO 法人おーさあが地域においてどのように子ども・障害者・高齢者を区分することなく、また商店街や地域住民とともに地域包括ケアを展開してきたのか、その今日的課題について報告していただいた。

成 果：NPO 法人おーさあは、5つの社会福祉法人や NPO 法人が合同で立ち上げた NPO 法人であり、設立当初から官民協力しながら展開してきた小規模多機能ケアの拠点

であると同時に、理事会に多数の地域住民が入って運営されているなど、先進的・先駆的な地域包括ケアの取り組みをしているが、そうした実践においても複数の支援の課題があり、スポット的解決ではなく、「地域」それ自体を変えていくことが求められていることを学んだことで、学生たちは現実への理解を大いに深めることができた。

対象演習：B・C

実施日：2024年8月21日（水）15:40～17:20

講演者：林田 賢一郎 氏（熊本日日新聞大津総局総局長）

演題：慈恵病院の実践は社会に対して何を問いかけているのか

実施施設：びぷれすイノベーションスタジオ

実施内容：林田賢一郎氏は、長期にわたって慈恵病院の「こうのとりのゆりかご」（いわゆる「赤ちゃんポスト」）や内密出産や特別養子縁組などの取り組みについて、更には内密出産で生まれた子どもの知る権利などについて長期にわたって緻密な取材を重ねてきた記者である。そのため、個人情報やプライバシーの保護等は十分に留意していただきながらも、抽象論に陥ることなく、子どもを妊娠・出産する女性たちの幾重にも深い苦悩と葛藤、そして生まれてきた子どもたちの感情や困惑などを具体的に問い直すような講演をしていただいた。

成果：慈恵病院の「こうのとりのゆりかご」（いわゆる「赤ちゃんポスト」）や内密出産や特別養子縁組は複眼的に思考すべきことであり、様々な課題を突き付けるものでありながら、妊娠・出産した女性たちの自己決定や自己責任に還元することなく、男性たちの責任、さらには社会的責任をいかに考えるかが問われており、私たちのそもそもの「社会」のあり方が切実に問い直されるものであることを知ることを通じて、学生たちはこうした現実を人権ベースやジェンダー視点で思考することの重要性を改めて学んだ。大変実りのある講演となった。

実施日：2024年8月21日（水）17:45～19:45

講演者：蓮田 健 氏（医療法人聖粒会慈恵病院理事長）

演題：内密出産をめぐる女性の権利と子どもの権利

実施施設：医療法人聖粒会慈恵病院

実施内容：蓮田健氏に、慈恵病院はどのように、親が育てられない赤ちゃんを匿名で預かる「こうのとりのゆりかご」の取り組みを行ってきたのか、どのように国内初となる内密出産を受け入れてきたのか、こうした内密出産をめぐる女性の権利と子どもの権利がどのように問われているのか、どのような課題が浮上しているのか、フランスやドイツなどでの内密出産はどのように行われ、制度設計がなされているのかなどについて講演していただいた。

成果：本講演を通じて、慈恵病院の「こうのとりのゆりかご」（いわゆる「赤ちゃんポスト」）や内密出産や特別養子縁組などの取り組みが個別事例として考えるのではなく、女性や子どもの人権が問われている現実であり、日本社会における社会的責任や社会のあり方が根本的に問い直されることを改めて再確認する講演となった。加えて、現在における女性たちや子どものおかれている非対称な状況、さらにはそれを地域や社会がいかに解消していくのかという問題を思考するためのきわめて貴重な機会となった。

対象演習：B・C

実施日：2024年8月22日（木）11:20～13:00

講演者：太田 明 氏（国立療養所菊池恵楓園入所者自治会副会長）

演題：ハンセン病問題が問いかけること

実施施設：国立療養所菊池恵楓園入所者自治会館

実施内容：長きにわたり国立療養所菊池恵楓園自治会の会長・副会長を歴任してきた太田明氏に講演していただいた。太田明氏は、8歳の時にハンセン病と診断され、国立療養所菊池恵楓園に入所。ハンセン病当事者の視点からみたハンセン病をめぐる現代史、とりわけ2000年代以降のハンセン病国家賠償請求訴訟や黒川温泉宿泊拒否事件などの権利回復や人権啓発活動の取り組み、そうした中にも繰り返される差別や人権侵害の数々、国賠訴訟後に問われている問題に対していまだどのように当事者が声をあげているのかについて講演していただいた。

成 果：太田明氏が国立療養所菊池恵楓園入所者自治会の会長・副会長を務めてきた2000年代以降、すなわちこの四半世紀においては、ハンセン病国家賠償請求訴訟を契機にハンセン病当事者に対する権利回復や人権啓発活動の取り組みが様々行われてきたにもかかわらず、黒川温泉宿泊拒否事件をはじめ、ハンセン病当事者やその家族に対する差別・偏見、そして人権侵害はいまだ続いている。こうした差別現象がなにゆえ続いているのか、私たちの社会のあり様について徹底的に考える意義を再確認する非常に刺激的な講演であった。

実 施 日：2024年8月22日（木）15:00～16:40

講 演 者：川原 秀夫 氏（NPO 法人コレクティブ理事長）

演 題：小規模多機能ケアから熊本被災者支援、そして地域共生へ

実施施設：市民会館シアーズホーム第2会議室

実施内容：全国に先駆けて、宅老所・グループホームなどを通じたケア実践を展開したのち新たな小規模多機能ケアを展開してきたNPO 法人コレクティブの理事長である川原秀夫氏に講演していただいた。NPO 法人コレクティブにおける先駆的・先進的な高齢者ケアや地域ケアをいかに展開してきたのか、また、熊本地震の際には、災害派遣福祉チーム・熊本県 DCAT として被災された人びとの避難所生活を支えると同時に、地域ぐるみで被災者を支え続けていくプラットフォームをどのように構築してきたのかについて講演していただいた。

成 果：NPO 法人コレクティブの法人実践として、熊本市に小規模多機能ホーム「きなっせ」や「いつでんきなっせ」を開設した背景やそこでの課題、山鹿市に小規模多機能ホーム「いつでんどこでん」を設立した背景やそこでの課題、今日における小規模多機能ケアや地域ケアの新たなあり方などについて学生は具体的な事例から学ぶことができた。また、熊本地震の際において「非常時」に熊本県 DCAT として被災者支援を展開すると同時に、「平時」における地域実践や人びとが安心して暮らしていけるための人間関係がいかにほど重要であるのかを知るきわめて貴重な機会になった。

FLP演習C

<テーマ>

現代日本社会において人びとが生きていく場所としての地域を考える

<授業の概要>

現代日本社会においてどのように人びとが生きていくことを可能にする場所として、あるいはその逆に人びとが生きていく上での困難を生み出す場所として地域があるのか、その地域におけるどのような仕組み（家族、福祉、医療、教育、労働、社会運動、産業など）によって人びとが生き延びていくことが可能となったり、困難となっているのかを探求する。

演習 B、演習 C では、一年間を通じて東京圏郊外（八王子市・多摩市・日野市などのみならず、東京都・神奈川県・埼玉県・千葉県などを含む）をフィールドにインテンシヴなフィールドワークを実施すると同時に、春・夏・冬の3回、全国各地のフィールドワークを行うことを通じて比較検討をしていく。

<活動内容>

全体としては、2024年度は様々な制約を受けることがなく、自らが設計・計画したフィールドワークやインタビューを中心とする調査を実際に実施することができ、大変充実したものとなった。具体的には、定期的な東京圏でのインタビュー調査やフィールドワークを実施すると同時に、熊本県（熊本市ならびに合志市）での夏季フィールドワークも実施することができた。そのため、ゼミ生はインタビューを中心に大変実りのある調査を実施し、その研究成果をゼミ報告書の形で結実してくれた。大変充実した1年間となった。

前期は、共通する問題関心をもとに「障害者班」「女性班」「つながり班」の3グループに分けて、それぞれのグループごとに研究計画を作成し、調査対象者を選定し、実際に調査対象者に調査依頼をしてインタビューを実行した。調査は2024年6月～2025年1月にかけて、各グループが自らのテーマに関連する分野において支援活動を行っているNPO法人や当事者会（ピアグループ含む）などに対して実施した。各グループは概ね3つのNPO法人や当事者会（ピアグループ含む）等に1回90～120分程度のインタビューを行い、それらのインタビューを録音・録画した。調査後はインタビュー調査のデータのコーディング作業を行って、詳細かつ緻密な分析作業をできるだけ丁寧に行うようにした。

今年度の夏季フィールドワークは、2024年8月21日（水）～8月23日（金）において熊本県（熊本市ならびに合志市）にて実施した。

1日目の8月21日（水）は、熊本市において県営住宅の団地1階にて、近くの健軍商店会や地域住民とともに福祉の拠点となって、子ども・障害者・高齢者を包括的に支援しているNPO法人おーさあを訪問し、地域包括ケアの実践の可能性と困難について学び、一人一人のニーズに即して臨機応変に対応することの実践的意味について考察した。宮川いつ子氏（NPO法人おーさあ施設長）をはじめ、複数のスタッフからお話をお聞きすることができた。

その後、慈恵病院の取り組みに関して詳細な取材を続けてきた林田賢一郎氏（熊本日新新聞大津総局総局長）に講演をしていただく。その後、林田氏とともに慈恵病院を訪問し、蓮田健氏（医療法人聖粒会慈恵病院理事長）からこれまでの慈恵病院の「こうのとりのゆりかご」（「赤ちゃんポスト」）の取り組み、また今日における内密出産や特別養子縁組の実践における困難や課題などについて講演していただいた。

2日目の8月22日（木）は、国立療養所菊池恵楓園を訪問し、宮原保幸氏（国立療養所菊池恵楓園職員）にガイドしていただきながら、菊池恵楓園歴史資料館を見学した。その後、長きにわたって国立療養所菊池恵楓園自治会に関わってきた太田明氏（国立療養所菊池恵楓園自治会副会長）にこれまでのハンセン病当事者の闘いの歴史と今日におけるハンセン病問題における切実な課題について講演していただいた。

その後、熊本市内に戻り、宅老所・グループホーム・小規模多機能を通じて先駆的に高齢者支援を展開してきた川原秀夫氏（NPO法人コレクティブ理事長）に、今日において地域で高齢者を支えることの実践的意味とその課題、熊本地震における地域ケアの意味合いなどに

ついて講演していただいた。

3日目の8月23日（金）は、事前学習と東京圏にてフィールドワークを積み重ねてきた各グループに分かれて、「障害者班」は社会福祉法人ライン工房を、「女性班」は熊本市こころの健康センターを、「つながり班」はNPO 法人フリースクール地球子屋を各々訪問し、調査を実施した。

熊本県において地域に根差して当事者やその当事者を支える取り組みをしてきた人びとやNPO 法人などを訪ね、当事者や支援者に直接お話をお聞きすることは学生たちにとって大いなる学びとなった。このようなフィールドワークならびに講演から学生たちは現場にて何がどのように生じており、どのような困難や課題をもたらすかについて考えることはこれ以上の学びになったと確信するものである。

当ゼミの今年度のテーマは「地域における当事者の声と支援実践」である。各地域において困難を抱える人たちはいかに暮らしているのか、支援者は当事者をどのように支えているのかを分析した上で、それぞれの「地域」の差異を比較検討することで、「支援実践の場としての地域」を考察した。こうしたインタビューやフィールドワークで収集したデータを分析し、後期にはその分析と考察を深めた。

後期は、各グループで前期に実施したフィールドワークやインタビューの結果を踏まえ、新たに調査を設計し直し、更なるインタビューやフィールドワークを実施した。後期後半からはFLP 報告書の作成を行うと同時に、2025 年度にさらに本格的に展開する東京圏郊外調査プロジェクト（八王子市・多摩市・日野市ほか）のフィールドワークについて検討した。

学生たちは非常に熱心かつ緻密にフィールドワークやインタビューに取り組んでくれたため、きわめて実りのある一年になった。2025 年度に向けて更に本格的な調査プロジェクトの始動に向けた調査を行うことができたし、調査プロジェクト全体について学ぶこともできた。

<実態調査・見学調査・講演会>

実態調査（夏季フィールドワーク）は、2024 年8月21日（水）～8月23日（金）において熊本県（熊本市ならびに合志市）にて実施した。

対象演習：B・C

実施日：2024 年8月21日（水）～8月23日（金）

実施都市：熊本市ならびに合志市

実施場所：NPO 法人おーさぁ、医療法人聖粒会慈恵病院、国立療養所菊池恵楓園・他

2024 年度は、B・C 生のテーマである「地域における当事者の声と支援実践」について、宮川いつ子氏（NPO 法人おーさぁ施設長）、林田賢一郎氏（熊本日新聞大津総局総局長）、蓮田健氏（医療法人聖粒会慈恵病院理事長）、太田明氏（国立療養所菊池恵楓園入所者自治会副会長）、川原秀夫氏（NPO 法人コレクティブ理事長）を講師にお招きし、そのうち演習Cでは以下の講演会を開催した。

対象演習：B・C

実施日：2024 年8月21日（水）13:10～15:00

講演者：宮川 いつ子 氏（NPO 法人おーさぁ施設長）

演 題：NPO 法人おーさぁの地域実践とその展開

実施施設：健軍くらしささえ愛工房（県営健軍団地1階）

実施内容：宮川いつ子氏より、官民協力しながら全国に先駆けて先進的・先駆的な小規模多機能ケアを展開してきた NPO 法人おーさぁが地域においてどのように子ども・障害者・高齢者を区分することなく、また商店街や地域住民とともに地域包括ケアを展開してきたのか、その今日的課題について報告していただいた。

成 果：NPO 法人おーさぁは、5つの社会福祉法人や NPO 法人が合同で立ち上げた NPO 法人であり、設立当初から官民協力しながら展開してきた小規模多機能ケアの拠点

であると同時に、理事会に多数の地域住民が入って運営されているなど、先進的・先駆的な地域包括ケアの取り組みをしているが、そうした実践においても複数の支援の課題があり、スポット的解決ではなく、「地域」それ自体を変えていくことが求められていることを学んだことで、学生たちは現実への理解を大いに深めることができた。

対象演習：B・C

実施日：2024年8月21日（水）15:40～17:20

講演者：林田 賢一郎 氏（熊本日新聞大津総局総局長）

演 題：慈恵病院の実践は社会に対して何を問いかけているのか

実施施設：びぷれすイノベーションスタジオ

実施内容：林田賢一郎氏は、長期にわたって慈恵病院の「こうのとりのゆりかご」（いわゆる「赤ちゃんポスト」）や内密出産や特別養子縁組などの取り組みについて、更には内密出産で生まれた子どもの知る権利などについて長期にわたって緻密な取材を重ねてきた記者である。そのため、個人情報やプライバシーの保護等は十分に留意していただきながらも、抽象論に陥ることなく、子どもを妊娠・出産する女性たちの幾重にも深い苦悩と葛藤、そして生まれてきた子どもたちの感情や困惑などを具体的に問い直すような講演をしていただいた。

成 果：慈恵病院の「こうのとりのゆりかご」（いわゆる「赤ちゃんポスト」）や内密出産や特別養子縁組は複眼的に思考すべきことであり、様々な課題を突き付けるものでありながら、妊娠・出産した女性たちの自己決定や自己責任に還元することなく、男性たちの責任、さらには社会的責任をいかに考えるかが問われており、私たちのそもそもの「社会」のあり方が切実に問い直されるものであることを知ることを通じて、学生たちはこうした現実を人権ベースやジェンダー視点で思考することの重要性を改めて学んだ。大変実りのある講演となった。

実施日：2024年8月21日（水）17:45～19:45

講演者：蓮田 健 氏（医療法人聖粒会慈恵病院理事長）

演 題：内密出産をめぐる女性の権利と子どもの権利

実施施設：医療法人聖粒会慈恵病院

実施内容：蓮田健氏に、慈恵病院はどのように、親が育てられない赤ちゃんを匿名で預かる「こうのとりのゆりかご」の取り組みを行ってきたのか、どのように国内初となる内密出産を受け入れてきたのか、こうした内密出産をめぐる女性の権利と子どもの権利がどのように問われているのか、どのような課題が浮上しているのか、フランスやドイツなどでの内密出産はどのように行われ、制度設計がなされているのかなどについて講演していただいた。

成 果：本講演を通じて、慈恵病院の「こうのとりのゆりかご」（いわゆる「赤ちゃんポスト」）や内密出産や特別養子縁組などの取り組みが個別事例として考えるのではなく、女性や子どもの人権が問われている現実であり、日本社会における社会的責任や社会のあり方が根本的に問い直されることを改めて再確認する講演となった。加えて、現在における女性たちや子どものおかれている非対称な状況、さらにはそれを地域や社会がいかに解消していくのかという問題を思考するためのきわめて貴重な機会となった。

対象演習：B・C

実施日：2024年8月22日（木）11:20～13:00

講演者：太田 明 氏（国立療養所菊池恵楓園入所者自治会副会長）

演 題：ハンセン病問題が問いかけること

実施施設：国立療養所菊池恵楓園入所者自治会館

実施内容：長きにわたり国立療養所菊池恵楓園自治会の会長・副会長を歴任してきた太田明氏に講演していただいた。太田明氏は、8歳の時にハンセン病と診断され、国立療養所菊池恵楓園に入所。ハンセン病当事者の視点からみたハンセン病をめぐる現代史、とりわけ2000年代以降のハンセン病国家賠償請求訴訟や黒川温泉宿泊拒否事件などの権利回復や人権啓発活動の取り組み、そうした中にも繰り返される差別や人権侵害の数々、国賠訴訟後に問われている問題に対していまだどのように当事者が声をあげているかについて講演していただいた。

成 果：太田明氏が国立療養所菊池恵楓園入所者自治会の会長・副会長を務めてきた2000年代以降、すなわちこの四半世紀においては、ハンセン病国家賠償請求訴訟を契機にハンセン病当事者に対する権利回復や人権啓発活動の取り組みが様々行われてきたにもかかわらず、黒川温泉宿泊拒否事件をはじめ、ハンセン病当事者やその家族に対する差別・偏見、そして人権侵害はいまだ続いている。こうした差別現象がなにゆえ続いているのか、私たちの社会のあり様について徹底的に考える意義を再確認する非常に刺激的な講演であった。

実 施 日：2024年8月22日（木）15:00～16:40

講 演 者：川原 秀夫 氏（NPO 法人コレクティブ理事長）

演 題：小規模多機能ケアから熊本被災者支援、そして地域共生へ

実施施設：市民会館シアーズホーム第2会議室

実施内容：全国に先駆けて、宅老所・グループホームなどを通じたケア実践を展開したのち新たな小規模多機能ケアを展開してきたNPO 法人コレクティブの理事長である川原秀夫氏に講演していただいた。NPO 法人コレクティブにおける先駆的・先進的な高齢者ケアや地域ケアをいかに展開してきたのか、また、熊本地震の際には、災害派遣福祉チーム・熊本県 DCAT として被災された人びとの避難所生活を支えると同時に、地域ぐるみで被災者を支え続けていくプラットフォームをどのように構築してきたのかについて講演していただいた。

成 果：NPO 法人コレクティブの法人実践として、熊本市に小規模多機能ホーム「きなっせ」や「いつでんきなっせ」を開設した背景やそこでの課題、山鹿市に小規模多機能ホーム「いつでんどこでん」を設立した背景やそこでの課題、今日における小規模多機能ケアや地域ケアの新たなあり方などについて学生は具体的な事例から学ぶことができた。また、熊本地震の際において「非常時」に熊本県 DCAT として被災者支援を展開すると同時に、「平時」における地域実践や人びとが安心して暮らしていけるための人間関係がいかにほど重要であるのかを知るきわめて貴重な機会になった。

(6) 新原 道信 (文学部・教授)

FLP演習A

<テーマ>

地域に寄りそい、ひとにこころを寄せるフィールドワークと子どもたちが「生きやすい」コミュニティづくり

<授業の概要>

①ひとの「つながり」が希薄となりつつある地域社会において、地域に寄りそい、ひとにこころを寄せ、子どもたちが「ここで暮らしていきたい」と思えるようなコミュニティづくりをいかにしていくのか？——いま私たちが直面する地域社会の問題のほとんどは、地球規模となったグローバル社会の問題と結びついています。国際／国内と分けられないような惑星社会の問題に対して、どのような応答を試みたらよいのでしょうか。いまは亡きイタリアの社会学者メルッチは、「地政学的なブロックの間に依然として残っている亀裂、北と南との間のほとんど連結不可能なほどの裂け目、剥奪された人びとの間で鬱積している怒りの凄まじさ」を認めつつも、「存在しているものは何であれ、ただ存在するという理由のみによって静かに尊重されるようなテリトリー」を創ることに生涯を捧げました。新原ゼミは、この新たな社会構想の担い手となる“社会のオペレーター”——生活の場に居合わせ、ひとにこころを寄せ、声を聴き、要求の真意をつかみ、様々な「領域」を行き来し、〈ひとのつながりの新たなかたち〉を構想していくひと——の育成を目的としています。

②ゼミ生は、〈調査研究／教育／大学と地域の協業〉を実際に体験しつつ、“フィールドワークの力（自分で道を切り開き、大切なこと／出会うべきひとに出会い、他者とともに場を創る力）”を蓄えていきました。

- (1)都市と地域の社会学を学びつつ、惑星社会の様々な場で起こっている開発・発展をめぐる問題が、私たちの身近な暮らしとどう関わっているのかを理解しました。
- (2)それと同時に、実際の地域に入らせてもらいました。2年次には、前期から夏休みの実態調査にかけてフィールドワークの「技法・作法と倫理」「理論と方法」——生身の現実への理解力、フィールドへの入り方、ひととの接し方、関係のつくり方、所作、マナー、エチケットなど——を学び、サマースクールに参加、低関与型フィールドワークを体験しました。後期以降は、サマースクールの成果をとりまとめ、3年次からは、他の新原ゼミ（院・学部・FLP国際協力）の合同プロジェクトである「立川プロジェクト」を中心に、関与型フィールドワーク（参与観察）を実践し、4年次には個人のプロジェクトを立ち上げ実践することをめざします。ゼミ生有志の合同プロジェクトである「立川プロジェクト」は、院・学部・FLP（国際協力と地域公共）ゼミ有志で立川・砂川の公営団地や砂川地区の他の諸組織・団体（連合子供会、小中学校、児童館、児童養護施設など）や、被災地での活動に参加させていただいています。
- (3)ゼミ運営とフィールドワークの計画立案・実施も含めてゼミ生主導で実行していきました。とりわけゼミの途中での留学や長期の海外フィールドワーク、国内での被災地ボランティアなどにチャレンジする学生を応援しています。立川・砂川など、ゼミとして続けてきた“コミュニティを基盤とする参与的調査研究 (Community-Based Participatory Research (CBPR))”は、同じ試みを現地で行っているイタリア、ブラジル、インドなどの大学とも知見を共有していきます。

<活動内容>

「新原ゼミ」は、文学部の学部と大学院、FLP「地域・公共マネジメント」と「国際協力」という、多様なゼミの総称です。4つのゼミには、これまで中央大学のほとんどすべての学部から多才な学生が集まり、社会学の理論やフィールドワークの方法、とりわけ“コミュニ

ティを基盤とする調査研究（Community-Based Research（CBR））”と“療法的でリフレクシブな調査研究（Therapeutic and Reflexive Research(T&R)）”を学んでいます。

フィールドワークは、文献から学ぶとともに、実際に身体をうごかし、生の声を聴くこと、〈あるき・みて・きいて・しらべ・ともに考え・かく〉ことを大切にする学問です。大学の外に出て、あらゆることに耳をすまし、出来る限りそれらを記憶・記録し、その意味を考え、調べ、ふりかえります。一つ一つのことを慎重に行い、地域で暮らす人たちの想いや歴史を丁寧に理解し、信頼関係を築きあげていくことを心がけています。

新原ゼミの特徴は、一人一人が「自分で道を切り開く」こと、そういうひとたちが「ともに場を創る」ところです。年間のスケジュールから毎回のゼミ、司会進行、記録まで、誰が何をやるのか、フィールドワークの成果をどうまとめていくのか、何のために行き、何をするのか——〈教えられたり指示されたりする前にまず自分で始めてみること〉、〈チャレンジしたからこそ直面する「困難」や「危機」から学ぶこと〉を大切にして、毎年ゼロから、ゼミ生皆で話し合っ方針を決めてきました。

A 生は、岡山県津山市のサマースクールの事前調査、フィールドワーク、事後調査をメインの活動としました。「子どもと高齢者の交流を通じた地域の活性化」をテーマとして、津山市の高齢化、福祉に焦点をあて、関係施設にヒアリング、基本データや地理的状况について詳しく調べ、期末成果報告書を取りまとめました。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A・B

実施日：2024年8月17日(土)～2024年8月20日(火)

実施都市：岡山県津山市

実施場所：津山市役所・市立図書館・加茂町図書館・津山郷土博物館・中央児童館・津山子ども広場事務局・鶴山塾・津山市役所・ふれあいサロン・シルバー人材センター・城西まちづくり協議会・美作大学ボランティアセンター・他

実施内容：テーマごとに班を複数結成し、班ごとに〈テーマとリサーチ・クエスチョン〉を定めてフィールドワークを実施した。

成果：〈あるき・みて・きいて・しらべ・ふりかえり・ともに考え・かく〉を実践することにより、“異質性を含み混んだコミュニティ（composite community with heterogeneity）”の条件についての考察を深めた。

対象演習：A・B

実施日：2024年9月17日(火)～2024年9月18日(水)

実施都市：山梨県河口湖町

実施場所：富士御室浅間神社・勝山歴史民俗資料館・他

実施内容：新原学部・院ゼミ、FLP 国際協力ゼミとの合同で、テーマごとに班を複数結成し班ごとに〈テーマとリサーチ・クエスチョン〉を定めてフィールドワークを実施した。

成果：〈あるき・みて・きいて・しらべ・ふりかえり・ともに考え・かく〉を実践することにより、“異質性を含み混んだコミュニティ（composite community with heterogeneity）”の条件についての考察を深めた。

<成果報告書の概要>

1. はじめに
2. 市の概要
3. 現状分析
4. サマースクールについて
5. 政策提言
6. まとめ

7. 謝辭

8. 參考文獻

FLP演習B

<テーマ>

地域に寄りそい、ひとにこころを寄せるフィールドワークと子どもたちが「生きやすい」コミュニティづくり

<授業の概要>

①ひとの「つながり」が希薄となりつつある地域社会において、地域に寄りそい、ひとにこころを寄せ、子どもたちが「ここで暮らしていきたい」と思えるようなコミュニティづくりをいかにしていくのか？——いま私たちが直面する地域社会の問題のほとんどは、地球規模となったグローバル社会の問題と結びついています。国際／国内と分けられないような惑星社会の問題に対して、どのような応答を試みたらよいのでしょうか。いまは亡きイタリアの社会学者メルッチは、「地政学的なブロックの間に依然として残っている亀裂、北と南との間のほとんど連結不可能なほどの裂け目、剥奪された人びとの間で鬱積している怒りの凄まじさ」を認めつつも、「存在しているものは何であれ、ただ存在するという理由のみによって静かに尊重されるようなテリトリー」を創ることに生涯を捧げました。新原ゼミは、この新たな社会構想の担い手となる“社会のオペレーター”——生活の場に居合わせ、ひとにこころを寄せ、声を聴き、要求の真意をつかみ、様々な「領域」を行き来し、〈ひとのつながりの新たなかたち〉を構想していくひと——の育成を目的としています。

②ゼミ生は、〈調査研究／教育／大学と地域の協業〉を実際に体験しつつ、“フィールドワークの力（自分で道を切り開き、大切なこと／出会うべきひとに出会い、他者とともに場を創る力）”を蓄えていきました。

- (1)都市と地域の社会学を学びつつ、惑星社会の様々な場で起こっている開発・発展をめぐる問題が、私たちの身近な暮らしとどう関わっているのかを理解しました。
- (2)それと同時に、実際の地域に入らせてもらいました。2年次には、前期から夏休みの実態調査にかけてフィールドワークの「技法・作法と倫理」「理論と方法」——生身の現実への理解力、フィールドへの入り方、ひととの接し方、関係のつくり方、所作、マナー、エチケットなど——を学び、サマースクールに参加、低関与型フィールドワークを体験しました。後期以降は、サマースクールの成果をとりまとめ、3年次からは、他の新原ゼミ（院・学部・FLP 国際協力）の合同プロジェクトである「立川プロジェクト」を中心に、関与型フィールドワーク（参与観察）を実践し、4年次には個人のプロジェクトを立ち上げ実践することをめざします。ゼミ生有志の合同プロジェクトである「立川プロジェクト」は、院・学部・FLP（国際協力と地域公共）ゼミ有志で立川・砂川の公営団地や砂川地区の他の諸組織・団体（連合子供会、小中学校、児童館、児童養護施設など）や、被災地での活動に参加させていただいています。
- (3)ゼミ運営とフィールドワークの計画立案・実施も含めてゼミ生主導で実行して行きました。とりわけゼミの途中での留学や長期の海外フィールドワーク、国内での被災地ボランティアなどにチャレンジする学生を応援しています。立川・砂川など、ゼミとして続けてきた“コミュニティを基盤とする参与的調査研究（Community-Based Participatory Research(CBPR)）”は、同じ試みを現地で行っているイタリア、ブラジル、インドなどの大学とも知見を共有していきます。

<活動内容>

「新原ゼミ」は、文学部の学部と大学院、FLP「地域・公共マネジメント」と「国際協力」という、多様なゼミの総称です。4つのゼミには、これまで中央大学のほとんどすべての学部から多才な学生が集まり、社会学の理論やフィールドワークの方法、とりわけ“コミュニ

ティを基盤とする調査研究（Community-Based Research（CBR））”と“療法的でリフレクシブな調査研究（Therapeutic and Reflexive Research(T&R)）”を学んでいます。

フィールドワークは、文献から学ぶとともに、実際に身体をうごかし、生の声を聴くこと、〈あるき・みて・きいて・しらべ・ともに考え・かく〉ことを大切にする学問です。大学の外に出て、あらゆることに耳をすまし、出来る限りそれらを記憶・記録し、その意味を考え、調べ、ふりかえります。一つ一つのことを慎重に行い、地域で暮らす人たちの想いや歴史を丁寧に理解し、信頼関係を築きあげていくことを心がけています。

新原ゼミの特徴は、一人一人が「自分で道を切り開く」こと、そういうひとたちが「ともに場を創る」ところです。年間のスケジュールから毎回のゼミ、司会進行、記録まで、誰が何をやるのか、フィールドワークの成果をどうまとめていくのか、何のために行き、何をするのか——〈教えられたり指示されたりする前にまず自分で始めてみることに〉、〈チャレンジしたからこそ直面する「困難」や「危機」から学ぶこと〉を大切にして、毎年ゼロから、ゼミ生皆で話し合っ方針を決めてきました。

B 生は、岡山県津山市のサマースクールを実施する A 生へのアドバイスをすることに加えて、「多摩ランタンフェスティバル」と京王電鉄と UR 都市機構主催の「第 3 回 学生による多摩エリアの街づくりに関するアイデアピッチ」への参加をしました。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A・B

実施日：2024 年 8 月 17 日(土)～2024 年 8 月 20 日(火)

実施都市：岡山県津山市

実施場所：津山市役所・市立図書館・加茂町図書館・津山郷土博物館・中央児童館・津山子ども広場事務局・鶴山塾・津山市役所・ふれあいサロン・シルバー人材センター・城西まちづくり協議会・美作大学ボランティアセンター・他

実施内容：テーマごとに班を複数結成し、班ごとに〈テーマとリサーチ・クエスチョン〉を定めてフィールドワークを実施した。

成果：〈あるき・みて・きいて・しらべ・ふりかえり・ともに考え・かく〉を実践することにより、“異質性を含み混んだコミュニティ（composite community with heterogeneity）”の条件についての考察を深めた。

対象演習：A・B

実施日：2024 年 9 月 17 日(火)～2024 年 9 月 18 日(水)

実施都市：山梨県河口湖町

実施場所：富士御室浅間神社・勝山歴史民俗資料館・他

実施内容：新原学部・院ゼミ、FLP 国際協力ゼミとの合同で、テーマごとに班を複数結成し班ごとに〈テーマとリサーチ・クエスチョン〉を定めてフィールドワークを実施した。

成果：〈あるき・みて・きいて・しらべ・ふりかえり・ともに考え・かく〉を実践することにより、“異質性を含み混んだコミュニティ（composite community with heterogeneity）”の条件についての考察を深めた。

対象演習：B・C

実施日：2024 年 10 月 7 日(月)～2024 年 10 月 13 日(日)

実施都市：多摩ニュータウン（東京都稲城市・多摩市・八王子市・町田市）

実施場所：J Smile 多摩八角堂

実施内容：「中央大学新原ゼミ企画ブース」として参加し、メイン会場の J Smile 多摩八角堂では、約 200 個のベトナム製ランタンが飾られ、1 週間の間異国情緒あふれる空間を演出した。

成果：〈あるき・みて・きいて・しらべ・ふりかえり・ともに考え・かく〉を実践す

ることにより、“異質性を含み混んだコミュニティ”の条件についての考察を深めた。

対象演習：B

実施日：2024年7月～2024年10月

実施都市：東京都稲城市

実施内容：京王沿線に在住・在学する大学生・高校生から「多摩エリアのまちを“誰かに自慢したくなるまち”にするためのアイデア」の募集に対して、サイクリングで稲城市を知のことをテーマとした報告を準備したる稲城市に関する調査を進め、最終審査に進める8作品に選ばれ、聖蹟桜ヶ丘アウラホールで11月9日（土）に行われた最終審査で優秀賞を受賞した。

<成果報告書の概要>

第1章 ランタンフェスティバル

1-1 イベント概要

1-2 振り返り

1-3 来年への展望

1-4 まとめ

第2章 学生による多摩エリアの街づくりに関するアイデアピッチ

2-1 概要

2-2 稲城市の現状

2-3 私たちの思い描く稲城市の姿

2-4 提案内容

2-5 講評

2-6 展望

おわりに

参考文献

FLP演習C

<テーマ>

地域に寄りそい、ひとにこころを寄せるフィールドワークと子どもたちが「生きやすい」コミュニティづくり

<授業の概要>

①ひとの「つながり」が希薄となりつつある地域社会において、地域に寄りそい、ひとにこころを寄せ、子どもたちが「ここで暮らしていきたい」と思えるようなコミュニティづくりをいかにしていくのか？——いま私たちが直面する地域社会の問題のほとんどは、地球規模となったグローバル社会の問題と結びついています。国際／国内と分けられないような惑星社会の問題に対して、どのような応答を試みたらよいのでしょうか。いまは亡きイタリアの社会学者メルッチは、「地政学的なブロックの間に依然として残っている亀裂、北と南との間のほとんど連結不可能なほどの裂け目、剥奪された人びとの間で鬱積している怒りの凄まじさ」を認めつつも、「存在しているものは何であれ、ただ存在するという理由のみによって静かに尊重されるようなテリトリー」を創ることに生涯を捧げました。新原ゼミは、この新たな社会構想の担い手となる“社会のオペレーター”——生活の場に居合わせ、ひとにこころを寄せ、声を聴き、要求の真意をつかみ、様々な「領域」を行き来し、〈ひとのつながりの新たなかたち〉を構想していくひと——の育成を目的としています。

②ゼミ生は、〈調査研究／教育／大学と地域の協業〉を実際に体験しつつ、“フィールドワークの力（自分で道を切り開き、大切なこと／出会うべきひとに出会い、他者とともに場を創る力）”を蓄えていきました。

- (1)都市と地域の社会学を学びつつ、惑星社会の様々な場で起こっている開発・発展をめぐる問題が、私たちの身近な暮らしとどう関わっているのかを理解しました。
- (2)それと同時に、実際の地域に入らせてもらいました。2年次には、前期から夏休みの実態調査にかけてフィールドワークの「技法・作法と倫理」「理論と方法」——生身の現実への理解力、フィールドへの入り方、ひととの接し方、関係のつくり方、所作、マナー、エチケットなど——を学び、サマースクールに参加、低関与型フィールドワークを体験しました。後期以降は、サマースクールの成果をとりまとめ、3年次からは、他の新原ゼミ（院・学部・FLP国際協力）の合同プロジェクトである「立川プロジェクト」を中心に、関与型フィールドワーク（参与観察）を実践し、4年次には個人のプロジェクトを立ち上げ実践することをめざします。ゼミ生有志の合同プロジェクトである「立川プロジェクト」は、院・学部・FLP（国際協力と地域公共）ゼミ有志で立川・砂川の公営団地や砂川地区の他の諸組織・団体（連合子供会、小中学校、児童館、児童養護施設など）や、被災地での活動に参加させていただいています。
- (3)ゼミ運営とフィールドワークの計画立案・実施も含めてゼミ生主導で実行して行きました。とりわけゼミの途中での留学や長期の海外フィールドワーク、国内での被災地ボランティアなどにチャレンジする学生を応援しています。立川・砂川など、ゼミとして続けてきた“コミュニティを基盤とする参与的調査研究（Community-Based Participatory Research(CBPR)）”は、同じ試みを現地で行っているイタリア、ブラジル、インドなどの大学とも知見を共有していきます。

<活動内容>

「新原ゼミ」は、文学部の学部と大学院、FLP「地域・公共マネジメント」と「国際協力」という、多様なゼミの総称です。4つのゼミには、これまで中央大学のほとんどすべての学部から多才な学生が集まり、社会学の理論やフィールドワークの方法、とりわけ“コミュニ

ティを基盤とする調査研究（Community-Based Research（CBR））”と“療法的でリフレクシブな調査研究（Therapeutic and Reflexive Research(T&R)）”を学んでいます。

フィールドワークは、文献から学ぶとともに、実際に身体をうごかし、生の声を聴くこと、〈あるき・みて・きいて・しらべ・ともに考え・かく〉ことを大切にする学問です。大学の外に出て、あらゆることに耳をすまし、出来る限りそれらを記憶・記録し、その意味を考え、調べ、ふりかえります。一つ一つのことを慎重に行い、地域で暮らす人たちの想いや歴史を丁寧に理解し、信頼関係を築きあげていくことを心がけています。

新原ゼミの特徴は、一人一人が「自分で道を切り開く」こと、そういうひとたちが「ともに場を創る」ところです。年間のスケジュールから毎回のゼミ、司会進行、記録まで、誰が何をやるのか、フィールドワークの成果をどうまとめていくのか、何のために行き、何をするのか——〈教えられたり指示されたりする前にまず自分で始めてみる〉こと、〈チャレンジしたからこそ直面する「困難」や「危機」から学ぶこと〉を大切にして、毎年ゼロから、ゼミ生皆で話し合っ方針を決めてきました。

C生は、岡山県津山市のサマースクールを実施するA生へのアドバイス、京王電鉄とUR都市機構主催の「第3回 学生による多摩エリアの街づくりに関するアイデアピッチ」に参加するB生へのアドバイスに加えて、先輩より引き継いだ「多摩ランタンフェスティバル」への参加を中心的に担い、研究論文を作成しました。

多摩ランタンフェスティバルは、多摩ニュータウンの豊ヶ丘・貝取エリアで開催されるイベントで、企業や自治体、地域住民が一体となって企画・実施されています。FLP 地域・公共プログラム新原ゼミは、日本総合住生活株式会社(JS)と協力し、関わらせていただきました。今年度は、C生が主体となってB生と共同で企画を行い、当日にはA生や文学部社会学専攻、FLP 国際協力プログラムのゼミ生もブースの運営に協力してくれました。

このランタンフェスティバルへの参加は地域の方々と実際に関わることができる機会の1つとなっています。新原ゼミの活動全体のテーマともいえる「地域に寄りそい、ひとにこころを寄せるフィールドワーク」の実践の場としてこれからも関わりを続けていくことができればよいと考えています。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：B・C

実施日：2024年10月7日(月)～2024年10月13日(日)

実施都市：多摩ニュータウン（東京都稲城市・多摩市・八王子市・町田市）

実施場所：J Smile 多摩八角堂

実施内容：「日常を照らす」をテーマとして開催された第6回多摩ランタンフェスティバルに、日本総合住生活株式会社(JS)と協力し、「中央大学新原ゼミ企画ブース」として参加した。メイン会場のJ Smile 多摩八角堂では、約200個のベトナム製ランタンが飾られ、1週間の間異国情緒あふれる空間を演出した。

成果：〈あるき・みて・きいて・しらべ・ふりかえり・ともに考え・かく〉を実践することにより、“異質性を含み混んだコミュニティ”の条件についての考察を深めた。

<研究論文の題目>

「児童虐待問題に関する法律の移り変わり」と地域社会の子どもの見守り方の研究」

「過去の地震発災時の避難所の課題と東京都品川区における首都直下地震発災時の避難課題調査」

(7) 川崎 一泰 (総合政策学部・教授)

FLP演習A・B・C

<テーマ>

地域計画のための分析手法

<授業の概要>

この科目では地域を設定し、問題発見をし、課題解決のための政策提言を行うことを最終目標とする。そのためのデータ収集、データ処理、分析などの座学にはじまり、現地調査などのフィールドワークや行政にヒアリング調査など多角的に学習する。

<活動内容>

川崎ゼミは、津山市におけるサマースクールに参加するため、文献調査からはじめ、データ分析等を通じて、地域課題の発見を試みた。関連する街づくりの事例を調査し、併せて制度研究も行い、アイデアの取りまとめを行った。春学期は総合計画を参考にしつつ、地域課題の把握と政策のポイントを把握した。また、都市計画や地区計画などの手法を学びつつ、民間投資による街並み形成や商業的価値についてディスカッションした。夏休みのサマースクールで現地を視察しつつ、ヒアリング等を通じて、地域課題を把握するとともに、地域の資源の確認も行った。秋学期はメンバーでディスカッションを重ね、具体的な政策提案のための絞り込みを行った。

また、長野県茅野市から委託研究費を受託し、八王子市の学生と茅野市民の交流を促す企画を市役所や関係団体とのディスカッションを通じて検討し、市長に提案した。

この他に東京都の事業に参加し政策提言を行った。

なお、学生たちの具体的な成果はそれぞれの報告書、HP 等に掲載されているので、そちらを参照されたい。

以下、今年度実施した実態調査の概要である。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A・B・C

実施日：2024年8月18日(日)～8月20日(火)

実施都市：岡山県津山市

実施場所：津山市役所、バス運営事業者・他

実施内容：民間の交通事業者と公的部門の双方から事情をヒアリングし、課題と対応を考えた。

成果：現場の状況を把握した。座学で学んだ制度が活用され、実際の運営上の課題をヒアリングするとともに、実際に乗車して、来訪者目線で地域交通の課題を認識するとともに、政策的課題を抽出した。

対象演習：A・B・C

実施日：2024年7月30日(火)～7月31日(水)

実施都市：長野県茅野市

実施場所：茅野市役所

実施内容：市職員による茅野市の現状説明と委託研究の内容説明。

成果：市の現状把握と施設見学。

対象演習：A・B・C

実施日：2025年1月16日(木)～1月17日(金)

実施都市：長野県茅野市

実施場所：茅野市役所

実施内容：市役所担当課職員に、アイデア説明と実行可能性の検討。駅前のワークラボの見学と現状をヒアリング。

成 果：市の実態との乖離部分を確認し、政策を修正した。

対象演習：A・B・C

実 施 日：2025 年 3 月 16 日(日)～3 月 17 日(月)

実施都市：長野県茅野市

実施場所：茅野市役所

実施内容：市長、副市長に対して、政策提言。

成 果：3 月 17 日(月)に、茅野市役所にて茅野市長、副市長、市幹部の前で受託研究成果報告として、政策提言を行った。提案の内容及び様子を現地メディア(LCV-TV、信濃毎日新聞、長野日報)に取り上げられ、学生たちのモチベーションアップに寄与した。

(8) 小林 勉 (総合政策学部・教授)

FLP 演習 A

<テーマ>

スポーツによる地域活性化の可能性に関する研究

<授業の概要>

J リーグのホームタウンの事例にみられるように、スポーツによって地域が大きな盛り上がりを見せるなど、近年、「地域」と「スポーツ」が結び付けられて論じられることが多くなっています。こうした捉えられ方はいつ頃から、どのような経緯の中でなされてきたのでしょうか。本授業ではそうした経緯について理解を深めながら、スポーツによる地域活性化の可能性について検討していきます。それと同時に、「スポーツの素晴らしさ」だけを焦点化するのではなく、地域活性化にスポーツを結びつけて考えようとする際の様々な課題についても検証します。

地域で展開されるスポーツの実情を踏まえながら、「地域とスポーツ」の関係について多角的な観点から検討できるようになることが、本授業の大きな目標です。

<活動内容>

FLP 小林ゼミ演習 A では、①津山市に向けた政策提言、②J リーグクラブとの連携イベントの運営サポート、③J リーグクラブとの連携プロジェクトの運営サポートを行った。

まず、①「津山市に向けた政策提言」では、8 月に訪れた岡山県津山市において、どのような現状か、何が課題かを津山市役所へのヒアリング調査や現地でのフィールドワークによって明らかにし、そこで得た情報から「シティプロモーションを用いた観光政策」をテーマに、経済活動活性化を促す政策提言を行った。

次に、②「J リーグクラブとの連携イベントの運営サポート」では、6 月に行われた明治安田秋田支社ポートボールサッカー教室の運営補助を行った。このイベントは明治安田秋田支社とブラウブリッツ秋田の提携によるものである。秋田の皆様の毎日に、「スポーツを通じてちょっとした福をプラスしたい」という想いのもと、「元気な街、秋田」の構築を目指してこのような企画の実施に至った。

③「J リーグクラブとの連携プロジェクトの運営サポート」では、J リーグクラブのブラウブリッツ秋田と本ゼミが 11 年間にわたって実施してきた共同プロジェクトであり、8 月のホームゲーム 1 試合のプロデュースを行った。プロジェクトの内容は、ポートボールサッカー大会開催、モザイクアートの作成、ハーフタイムイベント、ジャーナル作成、福+T シャツ作成等である。演習 A では、それらのコンテンツの運営サポートを行った。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A・B

実施日：2024 年 6 月 28 日(金)～2024 年 7 月 2 日(火)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ソユースタジアム・他

実施内容：J リーグクラブのブラウブリッツ秋田と連携し、試合前に開催された明治安田秋田支社プレゼンツ「多世代交流サッカー教室」の運営サポートを行った。

成果：秋田市やスタジアムの雰囲気を実際に感じることができ、老若男女問わずブラウブリッツ秋田のファン・サポーターや選手と触れ合うことができる貴重な機会となった。

対象演習：A・B・C

実施日：2024 年 8 月 23 日(金)～2024 年 8 月 26 日(月)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ソユースタジアム・他

実施内容：J リーグクラブのブラウブリッツ秋田と連携し、ホームゲームのプロデュースを行った。具体的には、年齢や性別を問わず参加可能な「ポートボールサッカー体験会」の運営支援や企画補助、複数の「福+ブース」の運営補助、スタジアム来訪者へ渡す「ジャーナル」、「クリアファイル」の配布などを行った。

成 果：実際の J リーグクラブと連携し、プロサッカーリーグの公式戦をプロデュースする支援をすることで、一つの公式戦が運営されるのに必要な要素がいかに多いのかを感じることができた。プロジェクトを通して、ファン・サポーターや選手、クラブスタッフの方々と関わることから、スポーツを通じた地域貢献の可能性を見いだすことができ、来年度のプロジェクトに向けて貴重な機会となった。

対象演習：A

実 施 日：2025 年 2 月 19 日(水)～2025 年 2 月 21 日(金)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：秋田市役所

実施内容：2025 年度に実施する J リーグクラブとの連携プロジェクトに関する打ち合わせ

成 果：J リーグクラブ側との打ち合わせを通じて、2025 年度の連携プロジェクトでは、「アウェイツーリズムをテーマに、観光 DX の推進に寄与すること」を共通目標とする方向性が確認された。具体的には、アウェイ来訪者の行動データや満足度の可視化、滞在価値向上に資する仕組みづくりを学生チームが主体となって企画・実施する方針で合意が形成された。5 月中に中間提案を行い、クラブ側からは地域事業者や観光団体との連携支援が得られる見通しである。

FLP演習B

<テーマ>

スポーツによる地域活性化の可能性に関する研究

<授業の概要>

Jリーグのホームタウンの事例にみられるように、スポーツによって地域が大きな盛り上がりを見せるなど、近年、「地域」と「スポーツ」が結び付けられて論じられることが多くなっています。こうした捉えられ方はいつ頃から、どのような経緯の中でなされてきたのでしょうか。本授業ではそうした経緯について理解を深めながら、スポーツによる地域活性化の可能性について検討していきます。それと同時に、「スポーツの素晴らしさ」だけを焦点化するのではなく、地域活性化にスポーツを結びつけて考えようとする際の様々な課題についても検証します。

地域で展開されるスポーツの実情を踏まえながら、「地域とスポーツ」の関係について多角的な観点から検討できるようになることが、本授業の大きな目標です。

<活動内容>

FLP 小林ゼミ演習Bは、Jリーグクラブとの共同プロジェクトである「福+プロジェクト」の企画運営を中心に、以下のような活動を行った。

1. みてファン！

高齢者施設や保育園を訪問し、「観る」という観点からスポーツを楽しんでもらう企画を行った。ブラウブリッツ秋田を幅広い世代の方々に知ってもらうとともに、スポーツを観戦することの楽しさ、応援することの喜びを知っていただくことができた。

2. 防災ビンゴ

昨今頻発する自然災害に対する対応する力をつけること、加えて防災に対するポジティブなイメージを持つことを目的とした企画を行った。日常生活の中で見かける防災に役立つ道具などに触れることで、防災についての知識を学び、災害に備えるきっかけを与えることができた。

3. ポートボールサッカー

ゼミ生が独自で考案した、走らないサッカーであるウォーキングサッカーとポートボールのルールを融合させた「ポートボールサッカー」という新しいスポーツを通じて、多世代間のコミュニケーション創出を図る企画を行った。老若男女問わず、参加者同士のコミュニケーションを創出することができた。

4. モザイクアート

スポーツを「観る」だけでないスポーツ観戦の魅力を発信することを目的とし、ファン・サポーターから写真を集め、モザイクアートを作成する企画を行った。写真を台紙に貼る作業をファン・サポーターにも協力していただき、クラブ創設15周年記念試合で展示した。これらの活動を通じ、福+プロジェクトの認知度向上に繋げることができた。

5. ハーフタイムイベント

ブラウブリッツ秋田のホームゲームの試合中やハーフタイムに、ブラウブリッツ秋田と愛媛FCのマスコットキャラクターとともに小学生とその保護者がリレー形式のゲームをする企画を行った。ピッチサイドでの試合観戦も含め、夏休み最後の思い出を作る機会を創出することができた。

6. ジャーナル／クリアファイル配布

皆様に日常から「福＋プロジェクト」を感じていただきたいという思いから作成した福＋プロジェクトオリジナルクリアファイルとブラウブリッツ秋田所属選手のインタビューを掲載したジャーナルを入場ゲートにて配布した。試合前に観客席にてジャーナルを読んでいる方や後日クリアファイルを使用している方を見かけることがあり、作成した意義を感じることができた。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A・B

実施日：2024年6月28日(金)～2024年7月2日(火)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ソユースタジアム・他

実施内容：ブラウブリッツ秋田のホームゲームの前座として、明治安田秋田支社プレゼンツ「多世代交流サッカー教室」の運営を行った。またプロジェクト実施にあたり、関係機関に対して挨拶及びスポンサーシップ広報活動を行った(主に中央大学学生会秋田県支部定期総会の方々)。

成果：多世代交流サッカー教室では、子どもから高齢者までの老若男女が参加し、多くのコミュニケーションと笑顔を生み出すことができた。また、関係機関に挨拶し、プロジェクトへの協賛を得ることができた。

対象演習：B

実施日：2024年7月22日(月)～2024年7月25日(木)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：さらさ秋田駅前・他

実施内容：みてファン！秋田県内施設訪問、事務所での準備等を行った。

成果：みてファン！企画に協力している各施設を訪問し、応援グッズ作成や試合応援を行ったことで、入居者の方々、スタッフの方々と交流をすることができた。また、その様子を地元テレビに取り上げてもらい、本プロジェクトの広報活動を行うことができた。

対象演習：B

実施日：2024年8月9日(金)～2024年8月12日(月)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ソユースタジアム・他

実施内容：ブラウブリッツ秋田と連携し、昨今頻発する自然災害に対する対応する力をつけること、加えて防災に対するポジティブなイメージを持つことを目的とした企画をソユースタジアム周辺にて実施した。

成果：日常生活の中で見かける防災に役立つ道具などに触れることで、防災についての知識を学び、災害に備えるきっかけを与えることができた。

対象演習：A・B・C

実施日：2024年8月23日(金)～2024年8月26日(月)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ソユースタジアム・他

実施内容：ソユースタジアムやブラウブリッツ秋田事務所にて、ブラウブリッツ秋田のクラブスタッフの方やA生～C生が協働し、プロジェクト当日に向けた最終準備、プロジェクトの運営を行った。

成果：プロジェクト当日まで約1年間進めてきた企画を実施し、ファン・サポーターの

方々や秋田県の方々にプロジェクトの目標である「笑顔と福」を届けることができ、加えてスポーツを通じた地域活性化の可能性を多角的に追及することができた。

対象演習：B

実施日：2024年9月13日(金)～2024年9月15日(日)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ソユースタジアム・他

実施内容：福＋プロジェクトの活動の意義やこれまでの歩みを伝える機会として、ソユースタジアムにて、ブラウブリッツ秋田のクラブ創設 15 周年を記念した、モザイクアートや福＋プロジェクトの様子をまとめた写真を展示した。

成果：モザイクアートの制作に携わったサポーターの方々が作品をじっくりと鑑賞し、写真を撮る姿が見られたほか、福＋プロジェクトに関心を持ち、活動について質問をする来場者も多く見受けられた。これにより、次年度の活動へとつながる貴重な機会となった。

対象演習：B

実施日：2024年10月16日(水)～2024年10月18日(金)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：株式会社ブラウブリッツ秋田・他

実施内容：ブラウブリッツ秋田事務所にて、福＋プロジェクトを支援してくれた関係者らに対して、プロジェクト全体を通じた報告会を実施し、今年度の活動を総括した。

成果：支援者、クラブスタッフらに福＋プロジェクトの全体報告をすることで、今年度の活動を総括することができ、次年度への課題を整理することができた。

FLP演習C

<テーマ>

スポーツによる地域活性化の可能性に関する研究

<授業の概要>

Jリーグのホームタウンの事例にみられるように、スポーツによって地域が大きな盛り上がりを見せるなど、近年、「地域」と「スポーツ」が結び付けられて論じられることが多くなっています。こうした捉えられ方はいつ頃から、どのような経緯の中でなされてきたのでしょうか。本授業ではそうした経緯について理解を深めながら、スポーツによる地域活性化の可能性について検討していきます。それと同時に、「スポーツの素晴らしさ」だけを焦点化するのではなく、地域活性化にスポーツを結びつけて考えようとする際の様々な課題についても検証します。

地域で展開されるスポーツの実情を踏まえながら、「地域とスポーツ」の関係について多角的な観点から検討できるようになることが、本授業の大きな目標です。

<活動内容>

FLP 小林ゼミ演習Cでは、演習A・Bで展開されるJリーグクラブとの連携プロジェクトの準備・運営サポートを行った。Jリーグクラブとの連携プロジェクトは、ブラウブリッツ秋田と本ゼミが11年間にわたり実施してきた共同プロジェクトである。プロジェクトに先立って行われた「多世代交流サッカー教室」および、演習Bを中心に企画立案された、プロジェクト当日の5つのコンテンツに対して、準備段階から実施当日の運営に至るまでの、協力支援活動を行った。プロジェクト10周年の節目を迎えた昨年度の経験をもとに、同様の企画を実施した際の学びを活かしながら、現地のプロジェクト支援者との連携や実際のイベント運営などについて後輩ゼミ生らのサポートをすることで、今年度のプロジェクト実施を支援した。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：C

実施日：2024年7月27日(土)～2024年7月28日(日)

実施都市：静岡県賀茂郡

実施場所：NPO法人あおぞらビレッジ

実施内容：静岡県賀茂郡河津町にて開催されたNPO法人あおぞらビレッジによるあおぞらキャンプの場において、ハーフタイムイベントにて実施予定のダンボールリレーのトライアルを行った。

成果：子どもたちを対象にトライアルを実施できたことで、ルール of 明確さやゲームの難易度、参加者の実際の反応を確認することができた。それらの問題点が浮き彫りになったことで、今年度 to 実施予定の新たなコンテンツに対して多くの課題を整理することができた。

対象演習：A・B・C

実施日：2024年8月23日(金)～2024年8月26日(月)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：ソユースタジアム・他

実施内容：Jリーグクラブのブラウブリッツ秋田と連携し、ホームゲームのプロデュースを行った。具体的には、年齢や性別を問わず参加可能な「ポートボールサッカー体験会」の運営支援や企画補助、複数の「福+ブース」の運営補助、スタジアム来訪者へ渡す「ジャーナル」、「クリアファイル」の配布などを行った。

成果：学生では経験できないようなプロスポーツの試合運営を実際に経験することで、

マネジメントの難しさを感じるだけでなく、企画力や実行力を身に付けることができた。また、スポーツを通じた社会貢献活動の可能性について検討することができた。

(9) 堤 和通 (総合政策学部・教授)

FLP演習A

<テーマ>

地域社会における社会安全政策

<授業の概要>

市民社会の安全を、多角的な考察を念頭に置いて、近隣地域や自治体行政をはじめとする社会的次元に焦点を合わせる社会安全政策のアプローチを学ぶ。社会安全政策のアプローチを活かして、自治体の協力を得て行われるサマースクールの準備、実施、報告を行う。

<活動内容>

前期中は夏休み中の津山市サマースクールの準備を進めた。津山市のウェブサイトを中心に各自が調べを進め、ゼミ時間中には情報の共有、質疑、意見交換を行い、津山市が掲げる「津山まちじゅう博物館」をテーマにすることとなった。まちじゅう博物館は「津山遺産を未来に引き継ぐための津山らしさの創造と地域活力の向上」を理念とするもので、歴史を踏まえた地域創成を志向し、構想時から取り入れられていた市民参画をその要素とする点で魅力的であり、アクションプランに掲記されている「現状及び課題」のうち、「津山市らしさの共有と津山遺産の発掘と創造」と「担い手となる人材の確保」がどのように進んでいるのかを津山市の協力を得て調べたいと考えたことによる。サマースクールまでの事前学習ではアクションプランを読み込み、現時点での具体的な実施例をたどる中で、「担い手となる人材の確保」につながる市民参画が一層求められるのではないかという問題意識を共有した。サマースクールでは、まちじゅう博物館に係る関連部課室に聞き取りを行うとともに、始動間もない構想の周知度を確かめるために現地でアンケートを行った。

後期にはサマースクールでの調査結果を踏まえ、市民参画を促進させる方策と、アンケートで示唆された認知度の低さを改善する方途について検討を重ねた。期末成果報告会では、津山市長にもオンライン参加いただき、ゼミ報告で取り上げた認知度の低さについては、市役所や市議会などで共有されているはずの重点施策としての重みとギャップがある旨のコメントがあった。

期末成果報告の準備に加えて、後期には、3年次から進める各自の調査研究の参考になるように、ゼミテーマの社会安全政策論について話題を提供した。社会安全政策論は社会成員の支配領域を等しく最大化することを理念とするもので、支配領域にとって重要な自由保障の概念を検討するという規範論と、それに適った制度設計・運用を行動科学の知見を借りて検討する技術論を両輪とする。3年次からのテーマの一つに考えられる学校教育については、これが支配領域の保証にとって重要な要素であることが論じられることを説明した。

さらに、後期の初めには、10月23日開催の東京都ワークショップに向けた準備を重点的に行った。東京都の重点政策のひとつである、「誰もが自分らしく生きるインクルーシブシティ東京」をテーマに、インクルーシブ教育について調べを進め、インクルーシブ教育の意義を確認し、その実現・促進を妨げている要因への対処策を報告した。

F L P 演習 B

<テーマ>

地域社会における社会安全政策

<授業の概要>

履修生の関心に沿って、修了論文テーマを見据えた個別報告を中心に進める。文献の検索と読み込み、ロジックの点検や関連論点の確認など、論文執筆に必要な調査研究の手順を身に着ける。

<活動内容>

前期、後期ともに、4 年次の終盤に完成稿を目指す修了論文を見据えた個別テーマについて、各自が調べを進め、ゼミ報告の際の質疑、コメントを踏まえてさらに調べを進めた。高齢者のウェル・ビーイングをテーマとする個別研究では、高齢者犯罪に関する犯罪学の調査研究を参考に検討を進めた。2 年次までに調べを進めていた高齢者犯罪の情勢と、現在の再犯防止策を踏まえたうえで、犯罪学・刑事政策の文献を読み進めた。この個別テーマは、支援を必要とするのはだれか、どのような支援が必要かという問題意識のよるものなので、刑事処分後の出口支援に加え新たに展開されている入口支援の重要性と可能性を検討するほか、支援が各ニーズに応えるのに必要となる、高齢犯罪者・加害者の実相に関する調査研究を確認しその含意を検討した。もう一つの個別テーマである、共用品の促進については、マイノリティ・マーケティングに焦点を当てて調べを進め、その前提にあるウェル・ビーイングの思想、障害についてのモデルを確認し、近時の CSR マーケティングというアイデアを参考にしながら検討を進めた。

前期、後期ともに個別報告に沿って授業計画を進めたが、これに併せて、ゼミテーマである社会安全政策論の説明を行った。社会安全政策論は社会成員の支配領域を等しく最大化することを理念とするもので、支配領域にとって重要な自由保障の概念を検討するという規範論と、それに適った制度設計・運用を行動科学の知見を借りて検討する技術論を両輪とする。個別テーマのうち、高齢者のウェル・ビーイングに関連する高齢者犯罪を検討する際に問われる予防策と更生策について社会安全政策論がどのような含意があるのかを説明した。また、共用品については、近代社会の統治原理が自由（消極的自由）保障、精神的自由の権利保障に重きを置いた時代の後に、配分正義への関心、あるいは、生存権概念の登場という時代を迎えていること、さらには、道徳哲学上の他敬の要求に加えて、ケアの倫理が説かれていることに呼応する側面があることを説明した。

個別の調査・報告に加え、後期の初めには、10 月 23 日開催の東京都ワークショップに向けた準備を重点的に行った。東京都の重点政策のひとつである、「誰もが自分らしく生きるインクルーシブシティ東京」をテーマに、孤立・孤独について調べを進め、孤独の定義を確認し、それが社会課題となる側面を明確にしたうえで、重点政策のデータにも挙がっている孤独についての調査から、他の年齢層に劣らず深刻な孤独問題を抱える学生・生徒に焦点を当て、居場所不足、公的相談機関を含めた低調な相談実績の問題に着眼し、オンラインイベント・コミュニティの提供を提言した。